甲斐国国分寺周辺聚落址の調査（予報）

— 末木両木神社付近の場合 —

1972・3

山梨県教育委員会

目　　次

1　はじめに……1

2　調査にいたる経過および環境……4

3　遺　　構……6

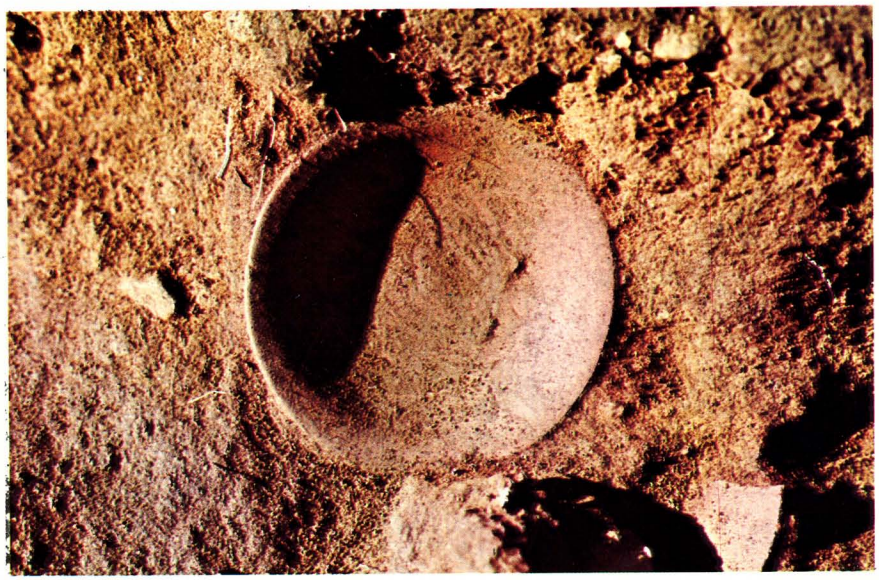
4　遺　　物……13

5　まとめ……18

図　版

甲斐国分寺（中央寄り）及び甲斐国分尼寺（左下方）

竪穴出土の緑釉陶器



竪穴出土の土師器及び鉄滓

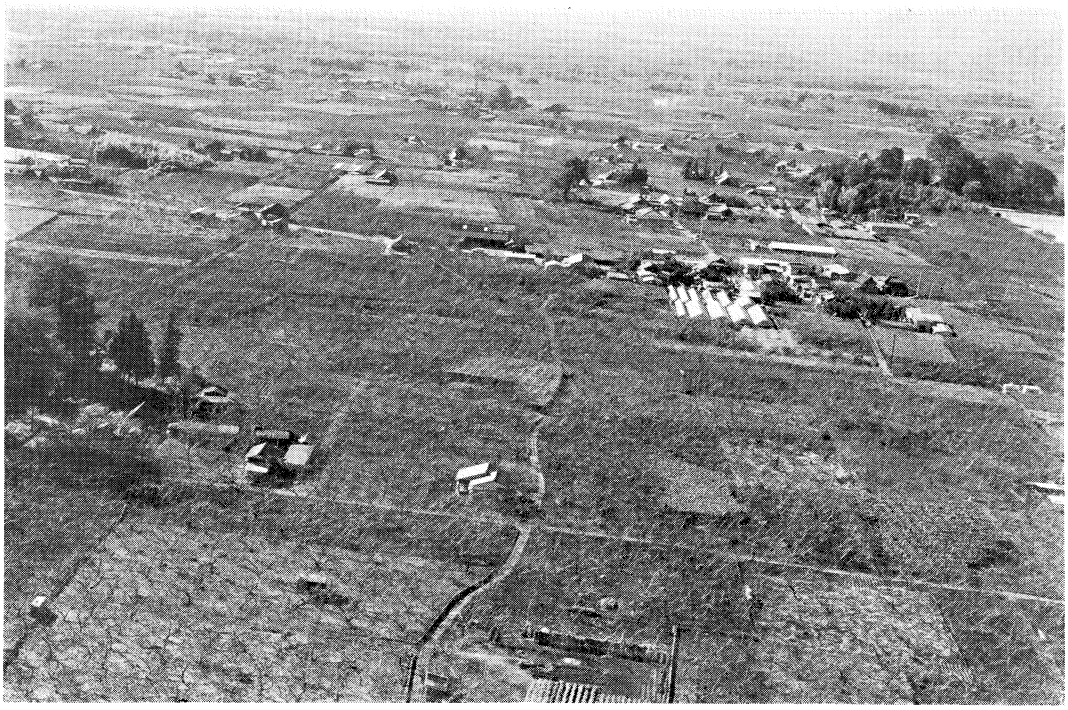
1 はじめに

奈良～平安期にかける聚落址の研究は，文献史料の面と考古学的調査による場合があり，特に山梨県では両者両面の研究のたちおくれが目立っている中で，最近の他県の成果については①長野県福島遺跡。②東京都中田遺跡など見るべきものが多い。また国分寺周辺の竪穴住居址の調査は昭和24年故甲野勇氏らによりおこなわれ，その成果について報告されているところである。

昨年秋日本考古学協会埋蔵文化財保護対策委員会で群馬県が試みた調査を「僧，尼中間地域の調査」「僧尼中間地域調査の意義」松島栄治氏外上野国寺遺跡を守る会の手によって③略報されているなど国分僧，尼両寺の寺域内に比して勝るとも劣らない学術資料として注目をあつめてきている。

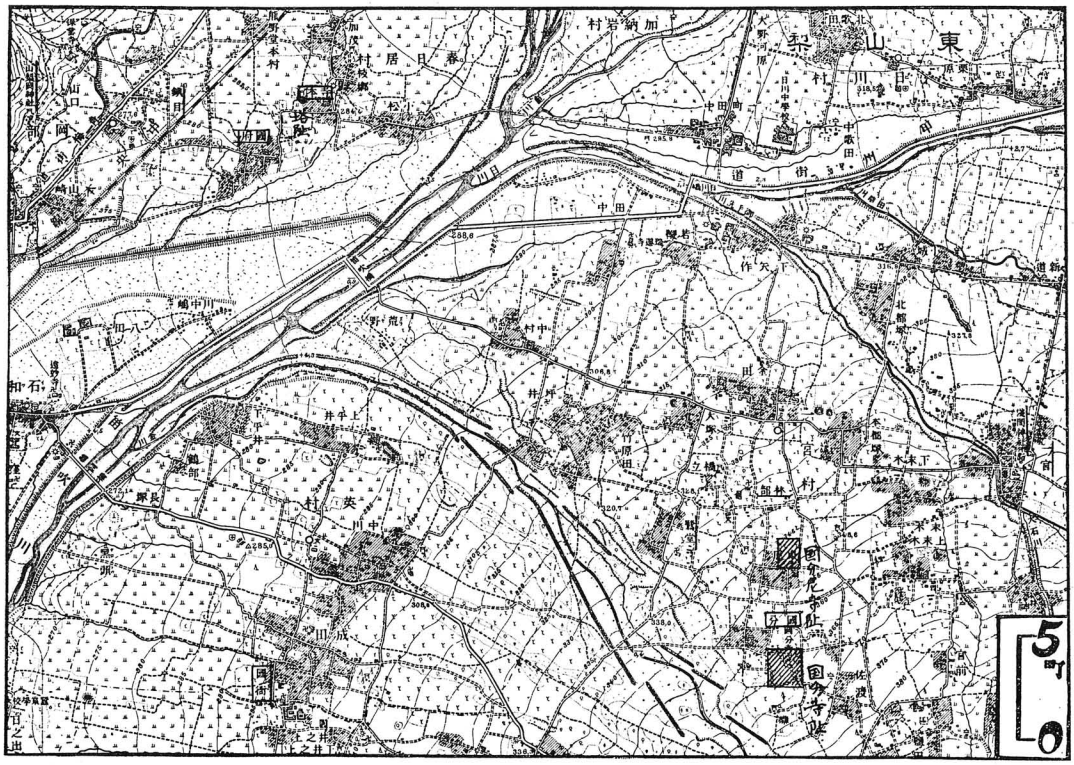
ここに報告する東八代郡一宮町字末木の両木神社付近については，すでに昭和44年度国費補助をともなう埋蔵文化財緊急分布調査の山梨市～三珠町間大規模農道路予定地調査時において「末木遺跡」としてその重要性を④指摘し，さらには昭和45年度の同様緊急分布調査の勝沼バイパス予定路線においても，公益性を有する開発施策の中にあって当然のこととして「点」から「面」へ保護対策を考えねばならないことを強調し，面でとらえる環境整備の具体案が必要である旨を⑤付言しておいたところであった。何故ならば，当該一宮町は，更に中央高速道路西宮線が勝沼町方面より御坂町，石和町方面に縦断し都合併せて３本の新設道路予定線が，国史跡地の寺域周辺を通過するからである。ただ幸いなことに今回の緊急調査にあっては（第４工区）既設農道を利用し，巾員を若干メートル拡幅するということであったが担当者自身も，寺域周辺の実体をすべて明らかにすることは至難なことであるし，むしろ，たといソーメン状のトレンチを設定することにより凡そ遺跡の範囲や，それらの在り方を可及的速やかに調査し歴史的環境の中での保存対策を前向きに打出す一方法ともなればと考え，そのことが焦眉の急務であることを認識しての参加であった。

そして若しこのことが許されるものとしたならば，本町の対岸金川扇状地形上の一角，石和町々営住宅付近（熊野神社域近接）から出土を見ている，四弁花文の陶器片や，黒笹系陶器片などからそれらにともなう土師器，や陶器，の編年的研究も可能となろうとする研究内容をもって調査をすることとしたのである。実のところこの種陶器片についての考古学的発掘調査遺物は本県の場合過去には全くなく緑釉陶器ですら本格的にその分布や実体などふれる機会は存しなかったからでもあり，僅かに戦前仁科義男氏が調査した南都留郡河口湖町船津上ノ段の窯跡付近から10数年前宅地造成の際の，出土遺物の中に緑釉陶器細片が確められるなどから，灰釉陶器をも含めて，大場磐雄博士の「官道若しくはそれに準ずる道路にそって分布する傾向」にあてはまるかどうかの期待を発掘調査によって確めたいと考えてもみたのである。そのことは行政発掘の頻発によって研究者自身，退廃の道を無意識のうちに歩み，その主体制を考える余裕すらない例を残している現状にかんがみ少しでも本来のもつ学問的必然性に近づけたいと考えたからでもあった。（**山本寿々雄**）



第　1　図

手前を横に走る農道が広幅される大型農道で，これに直交を予定される勝沼バイパスがあり，そして中央高速自動車道に連り開発拠点となろうとしている。左端は両木神社から甲斐国分尼寺付近であり。礎石の一部が見える。



第 2 図

角田文衛著「国分寺の研究」所載当時の地形図。尼寺址東方約 0.3㎞ に末木両木神社がある。

2　調査にいたる経過および環境

さて前にもふれているように昭和44年度国費補助事業による緊急分布調査は「山梨市～豊富村間農免道路外」正確にいうと，農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業農免道路，山梨市，豊富村間ということになるこの種の大型農道建設事業は全国に先きがけてということであり，区間22.1キロメートルの内16.2キロメートルが１部既設道路を含めての包含地調査の対象となり巾員は6.5メートルで一応路線予定地内の100メートル巾を緊急に分調査するという内容のもので，昭和45年１月20日付山梨県教育長名による調査員会議が招集されたのである。そしてその結果については，埋蔵文化財緊急分布調査報告書昭和44年度によって明らかにされ，道路建設を阻まず，文化財をできる限り保護してゆく方途をとらなければならないとされるにいたったのであるが，この件に関して具体的に三者協議の場を作ることは（企業者側，保護主管者側，研究者側）みられないままに昭和46年11月３日三者が工区間の現状況視察ということになりニクソン新経済政策によって，当該の等４工区間外を昭和47年３月20日までに完了，緊急の事前調査は出来得るならば11月中にして欲しい旨であった。

このような経過をたどる中には，さきに示しておいたように⑥「三角図表」によって，筆者なりに仮に保存率というものを定めて，これが企業者側にも，保護の主管者側にも，そして研究者自身にもメルクマールとして活用し数量化することによりさらに前向きに理解を深めたいとしたのであるが，まだ保護主管者側と企業者側との間には緊急調査に対する⑦覚書の交換というものすらわが山梨県では交わされていない現実を，とびこえて破壊を正当化するためのケースバイケースで処理されてはならないための一方法ともしたのであった。

したがって点から面への保護対策を考える手段としてまえがきにもふれているような考えの下に自身調査体制をなし，甲斐国分尼寺周辺の一角にトレンチ設定と相成ったわけである。

一宮町の国分両寺近在（国分，末木）は，金川，大石，御手洗川の間にあり河川氾濫地の上に成立っている平坦地であり特に金川の場合，⑧航空機よりの観察では明瞭に八幡橋付近より西南方面に広く長く河川氾濫地が及んでいることがわかる（御坂町，石和町）そして主として後期古墳と，土師式中期以降の落址が予想されているのに対し一宮町，国分～塩田にかけては縄文中期あるいは⑨先土器文化の包含層が存在しその上部に土師文化の層がみられるのも特徴の一つかも知れない。特に国分寺南大門近くからは縄文中期後半の遺跡の一部が判明している。末木両木神社近在の包含地にはこのような縄文期あるいはそれ以前の文化期のものは見当らず，表面採集その他の結果からも国分期等同時期の遺構のみである点が注目される。

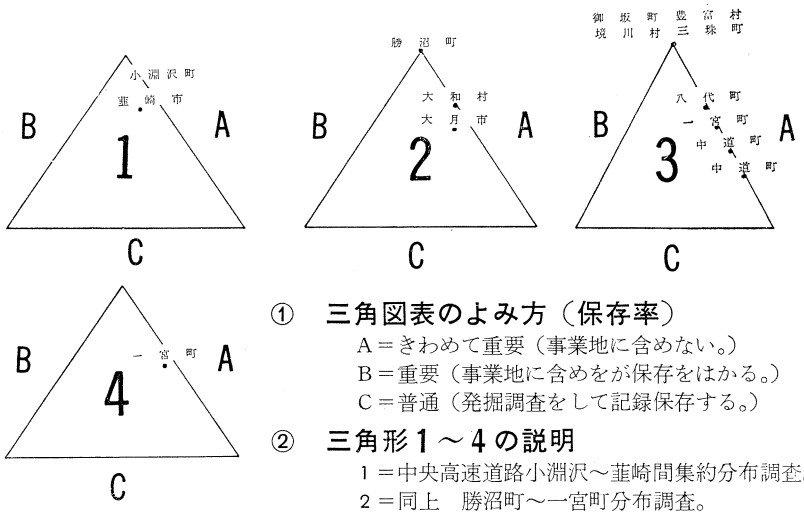
両木神社は国分尼寺の東方約0.3Kmのところにある。この神社前の農道が拡幅されて大型農免道路となるのであるが，更にこの付近で勝沼バイパス道路が直交を予定されている。またこれらの地域は，例えば平安中期の和名抄に示されている国府の位置の確定はともかく「国府は八代部に在り。行程上二十五日下十三日」にも見える地域の近在でもあり，大石川べりには式内社浅間神社など，甲斐

国律令的古代の中心地とも云えよう。そして標高360～200メートルの広い扇状地は果樹王国の名を欲しいままに農業の選択的規模拡大化が進んでいるのが現状である。

この地域に新総合開発計がすすみ，様相は一変しようとする今日歴史的環境の保護は県施策の急務であるといわねばなるまい。そして現在もなお中央高速自動車道が，航空写真で見るように，第4図の手前の八幡橋，と次の四ツ橋の中間地域に通過する構想がすすみ，一宮インターの要素として，次のようにまとめているのも重視しなければならないであろう。即ち

⑩ 一宮インターチエンジの要素として

①国道137号線に結んで郡内地方を経て，静岡県東名高速に結ぶに有利な地点である。②峡東バイパスと結び東山梨地方と連絡するに適している。③国中東部に対する交通が便利である。④一宮町及び周辺町村の地域開発が有望の箇所である。⑤周辺果樹地帯の流通機構改善のために有効である。をあげている。（**山本寿々雄・谷口一夫**）



第 3 図

保存率を見るための三角図表

① **三角図表のよみ方（保存率）**

A＝きわめて重要（事業地に含めない。）
B＝重要（事業地に含めをが保存をはかる。）
C＝普通（発掘調査をして記録保存する。）

② **三角形1～4の説明**

1＝中央高速道路小淵沢～韮崎間集約分布調査。
2＝同上　勝沼町～一宮町分布調査。
3＝大型農道一宮町～三珠分布調査。
4＝勝沼バイパス一宮町分布調査。
5＝角はそれぞれ100パーセントを示すものである。

参　考　文　献

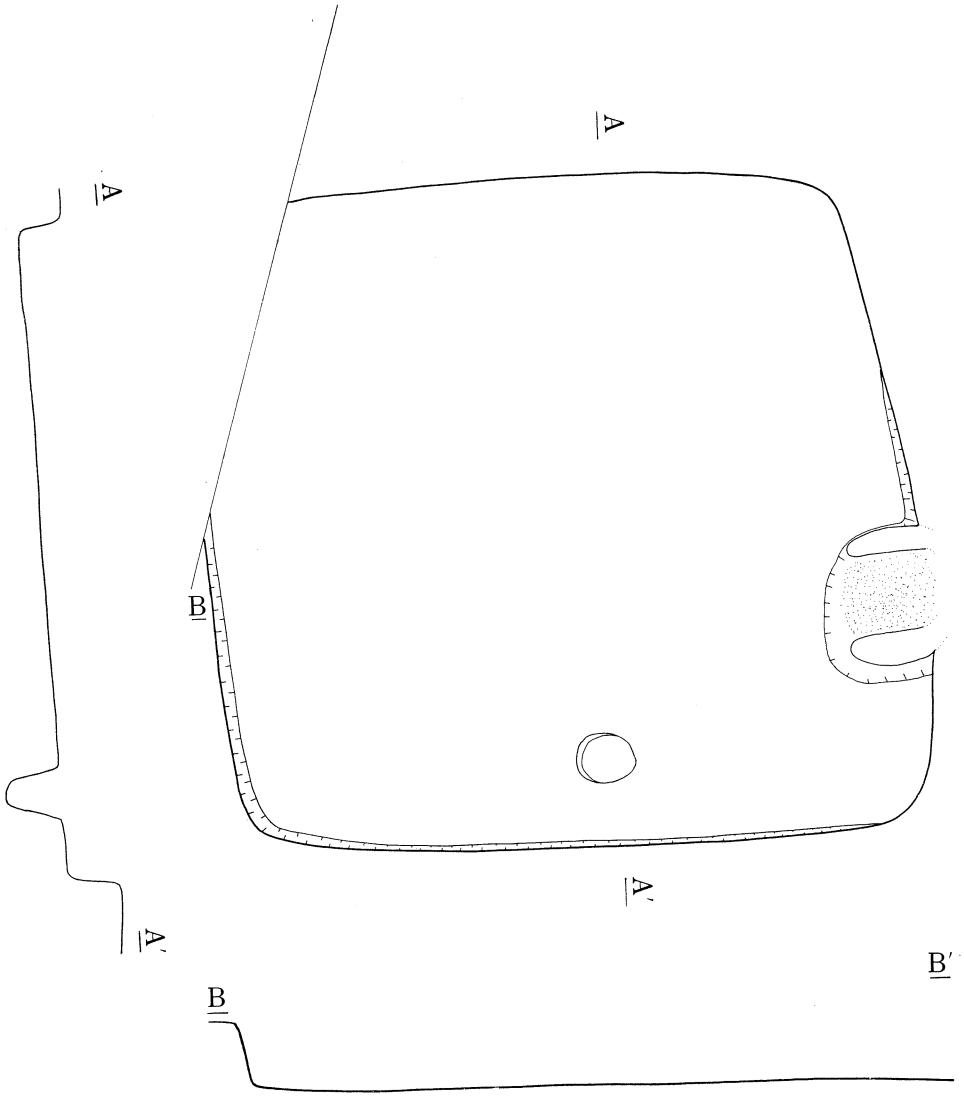
①	大川　清	伊那福島遺跡	長野県考古学会	1968
①	八王子中田遺跡調査会	中田遺跡　Ⅰ―Ⅲ	同調査会	1968
③	松島栄治	群馬県の国分寺遺跡について	日本考古学協会埋文委会発表要旨	1971
④	山本寿々雄	「一宮町」埋蔵文化財緊急分布調査報告書　S44	山梨県教育委員会	1971
⑤	同	「一宮町」〃　勝沼バイパス　S45	同	1972
⑥	同	行政発掘による学問の危機を三角図表よりみる	甲斐考古 9の1	1971
⑦	日本道路公団	日本道路公団の建設事業等工事施行に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱について	同公団	1967
⑧	山本寿々雄	航空機利用による山梨の古墳　Ⅱ	富士国立公園博物館研究報告　6	1961
⑨	森本圭一	山梨県東八代郡一宮町出土の尖頭器及び有舌尖頭器について	甲斐考古　6の2	196
⑩	山梨県	中央自動車道南廻り線（計画発表）		1970

第 4 図

金川八幡橋上空よりみる（大型農道通過地）前方に四つ橋をのぞむ。
この間を中央高速自動車道が一宮インターチェンジを設けて通過し開発の拠点となる。

3 遺　　構

聚落を構成する遺構としては，竪穴住居址，柱穴址，炉址あるいは井戸址など全国的に多くのものが報告されている。古くは昭和22年から27年にかけて①大場磐雄博士等外調査会の手による長野県東築摩郡宗賀村の平出遺跡が著名であり（縄文～土師）②本県山梨市日下部中学校々庭の聚落址もその１つである。地域的にも近接地にあるこの一宮町末木両木神社周辺も，どのような聚落構成を示すのかは，すでにおこなっている③緊急分布調査の際も大きな柱でもあった。表面採集などから考えてみても同一時期（国分末期）の土師器片や陶器片のみ，散々と部分的に示す状況から考え併せ一定地域に集中化しているよりは，むしろ散在しているのではあるまいかなどの予察はされているところであり，果樹等の樹木の植えこみ作業中明らかとなっている包含層の場合をみても，全く遺物包含層のないところと，部分的にしろ確なところなどの観察はその手がかりとなっていた。

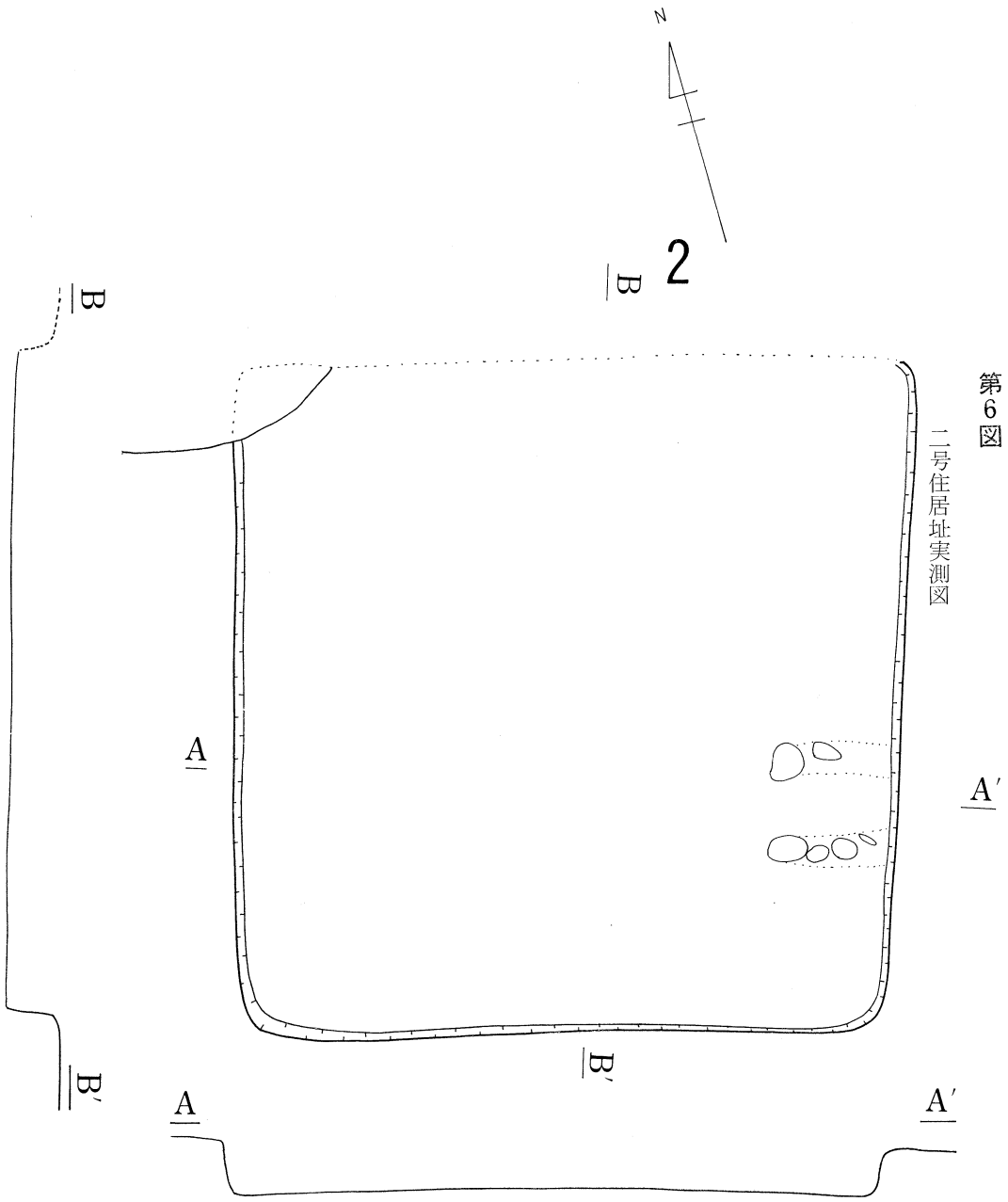


第5図　一号住居址実測図

今回の発掘調査では，若干の差違新旧の別はあっても時系列的に考えられる竪穴住居はあわせて五址で，その流れの間に展開されたことをうかがい知ることが出来ようかと思う。以下１号～５号までについてその特徴をあげて理解をしてみようと思う。

第１号住居址

本住居址のプランは東西3.5m，南北3.8mの隅丸方形を呈するようであり，東壁中央よりやや南側にカマドを設営する竪穴住居址である。壁高は東約30cm，西約38cm，南約33cm，北約13cmを計り，いずれの側壁も直立せずに外傾している。北壁が他に比べ低いのは，本遺跡が桃畑で非常に深く耕作している事実より，壁の上面が削平されたものと思われる。床面は，礫を含む地山そのものであるが遺存状態は良好で，全面に固く，ほぼ平らである。床面中央南東に直径30cm，深さ33cmを計るピットが，検出されたが他の柱穴は認める事はできなかった。カマドは東壁中央より南側に設営されて，長径80cm，短径60cm，高さ30cmの規模をもち，粘土造りであった。煙道の料無は，発掘区域外の為確認出来なかった。



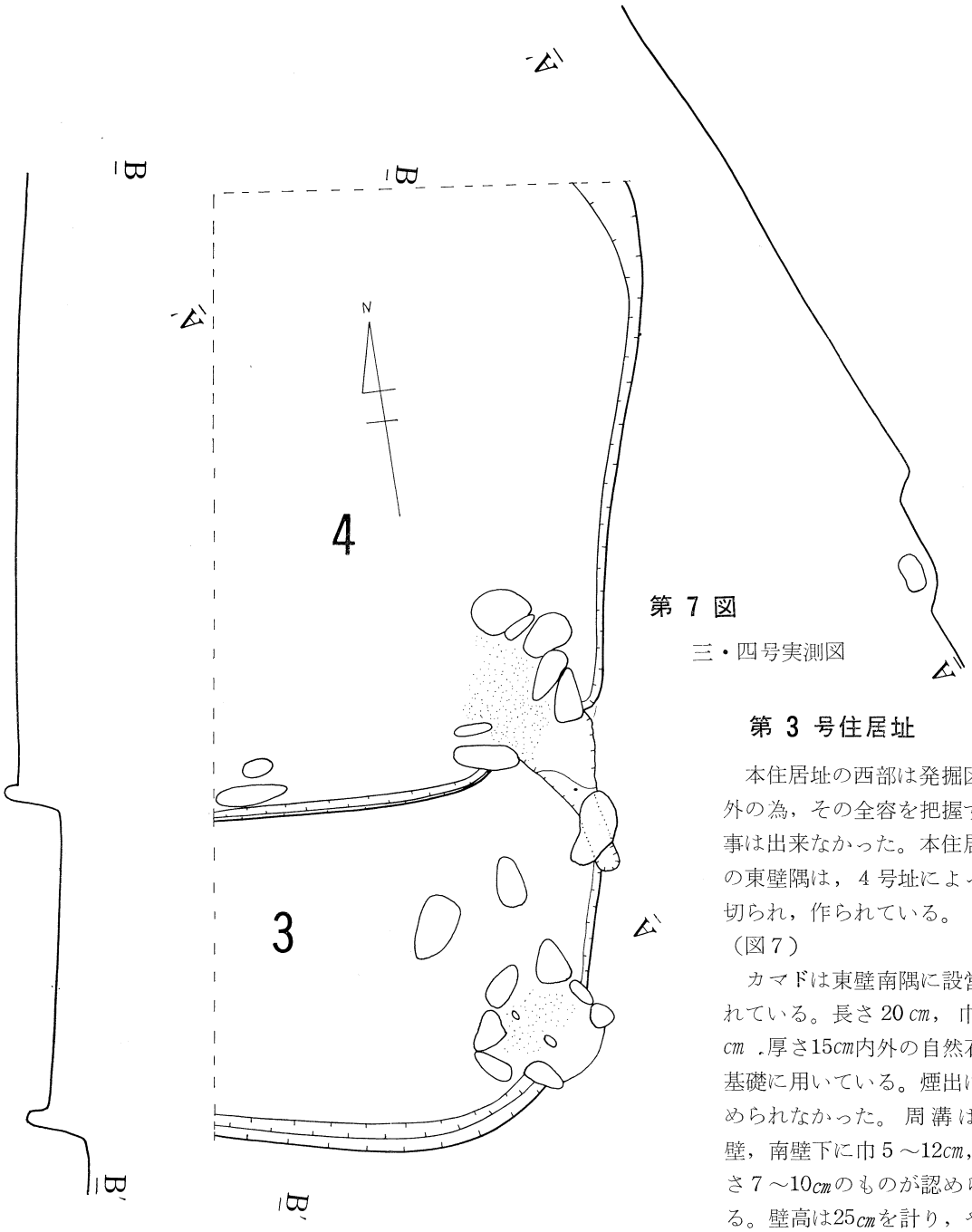
第6図 二号住居址実測図

第 2 号住居址

本住居址，北西部は，３号址により切られているのが認められる。一辺が約 3.5m の方形平面を呈する。カマドは，東壁中央より南側に設営される竪穴住居址である。

壁高は東約23cm，西約27cm，南約26cmを計り，いずれの壁もこころもち外傾している。床は，１号と同様地山そのものであり，床面全体が固く，遺存状態良好で平らである。

カマドはいわゆる石造りで，東壁中央より南側に設営されている。長径60cm，短径55cm，高さ20cmの規模をもち，基礎には長さ10～20cm，巾10cm，厚さ10cm内外の自然石を用い，その全面を粘土で覆ったものと考えられる。煙出は認められない。



第 7 図

三・四号実測図

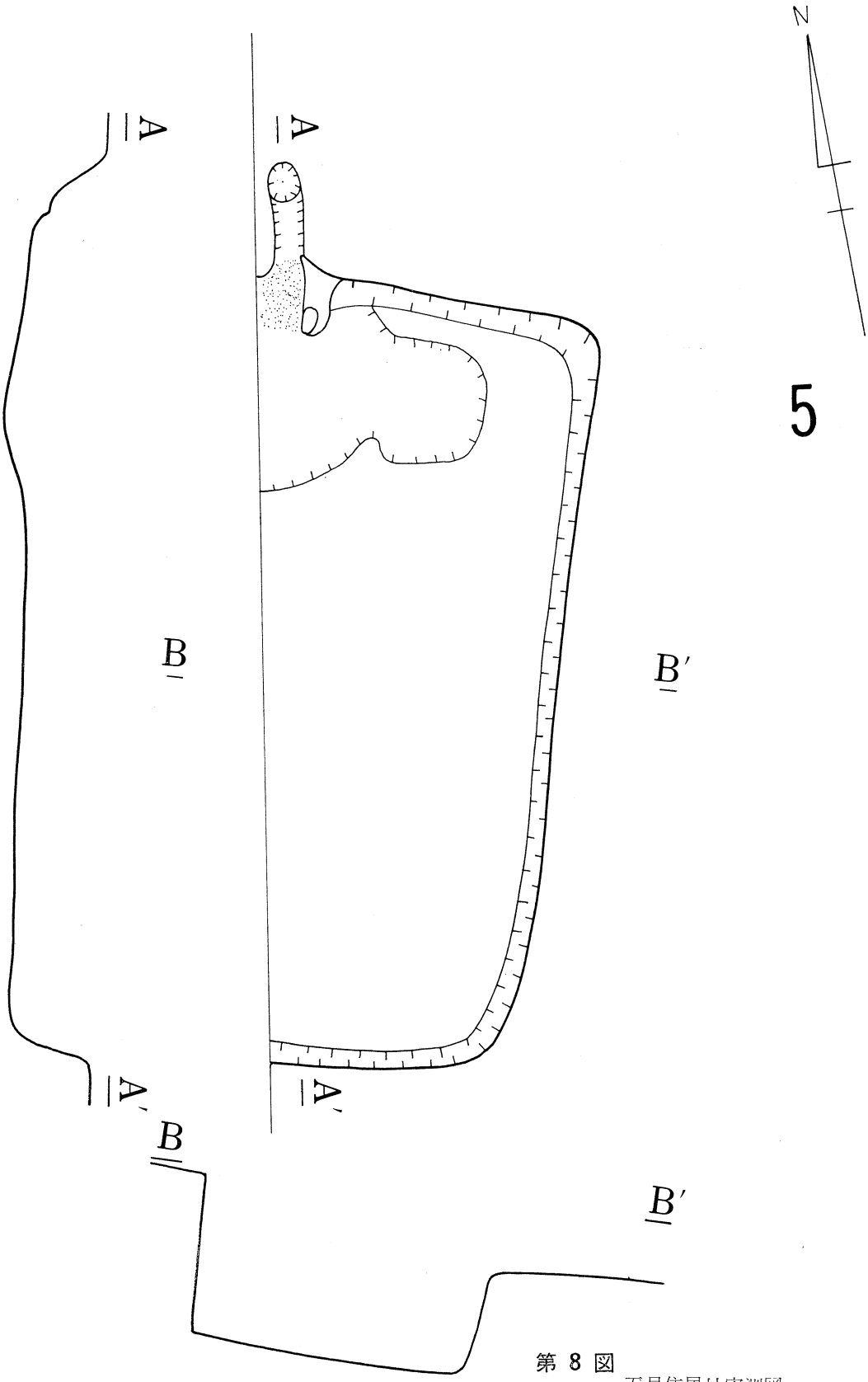
第 3 号住居址

本住居址の西部は発掘区域外の為，その全容を把握する事は出来なかった。本住居址の東壁隅は，4 号址によって切られ，作られている。（図7）

カマドは東壁南隅に設営されている。長さ 20 cm，巾 10 cm ，厚さ15cm内外の自然石を基礎に用いている。煙出は認められなかった。周溝は東壁，南壁下に巾 5 ～12cm，深さ 7 ～10cmのものが認められる。壁高は25cmを計り，やはり外傾する。床面は北部は 4 号に切られているが，残存部は固く平らであった。

第 4 号住居址

本住居址の南側壁は，3 号址を切って造られている。床面は，やはり礫を含む地山そのものであるが遺存状態は良好で，全面が固い。柱穴らしき穴は全く認める事が出来ない。周溝は巾10cm深さ 5 cmで南側壁下に周っているのが認められる。カマドは東壁南隅に設営される。石組造りで，基礎には巾 6 ～20cm，長さ20～35cm，厚さ10～28cmの自然石を並列にならべたもので，その規模は高さ約30cm巾80cm，長さ85cm，を計る。煙道は，南方に向け巾10cm長さ約30cmで，煙出口の天井には巾20cm，長さ40cmの自然石の平石を用いて煙道を覆っている。



第 8 図
五号住居址実測図

第 5 号住居址

本住居址，西側は，道路上の為，プランの全容を確認できなかったが，方形を呈するものと推測される。壁高は北約32cm，南約30cm，東約43cmを計り，直立せずに外傾する。床面は地山そのもので，遺存もよく平らである。カマドは，巾0.9m，長さ1m，深さ５～７cmの深込を呈しているのみで，燃焼部と考えられる部分に焼土が認められた。石組，粘土で構築されたカマドが，道路造整の際に欠損されたものと考えられる。煙道は，長さ40cm，直径10cmのトンネルが北に伸びる。柱穴らしき穴は確認できなかった。

本遺跡の遺構についての概要を述べてきたが，これらより窺うことの出来る点について若干の考察を試みてみることにする。

竪穴式住居址は，平面プランの状態，カマドの構造的特徴などによって次の如くに分類する事が出来る。

A類　平面プラン，隅丸方形を呈し，カマドは，粘土造りで，柱穴が認められないもの。（１号址）

B類　平面プラン，方形を呈し，カマドは石組み造りで，煙道を料しないもの。（２号址）

C類　平面プラン，方形を呈するもので周溝が周るもの。カマドは石組造りのものを料するもの。煙道がはっきり認められるものとそうでないものがある（３・４号址）

A，B，C類に共通するものは

㈠　柱穴を有しない事

㈡　壁は直立せずに外傾する事

㈢　平面プランが方形を呈する事などについてである。

（小林広和）

第9図
両ノ木神社周辺の大型農道と発掘調査トレンチ設定図

4 遺　　物

本遺跡の出土遺物は，土師器，須恵器，緑釉陶器，灰釉陶器，土製品，刀子，刀装具，不明鉄製品鉄滓，砥であり，その殆んどが1号から5号の住居址内で発見されており，各トンンチ内よりは細かく割れた遺物が多く器形が復元出来るものは少い。

ここでは1号から5号住居址出土遺物の観察を中心に記述してみたい。とくに，本住居址出土遺物は一括資料として把握できるため，その資料的価値は高く，編年研究が端緒についたばかりの本県に於いて陶器編年と共にその指針となるようなものである。

1　第1号住居址内出土遺物

本住居址よりの出土遺物は，図上復元可能な土師器17点（墨書を含む），須恵器14点，緑釉陶器2点，灰釉陶器2点の他に土製品，刀子，刀装具及び国分寺瓦が見られる。

(1)　土　師　器

土師器の器形は杯・蓋・皿・甕・釜形土器及び小形土器で，この中の杯については形状，整形法から5類に細別が可能である。

杯1類（第10図1・2）口唇部が僅かに外反し，口縁部より内彎しながら底部に至るものである。底部は時計と逆回りに篦削りが見られ，底は糸切後に篦調整によって仕上げられたもので，一部に糸切痕が残っている。1の内面には放射状，2の内面には花弁状の篦磨きがそれぞれ見られる。胎土は精々されたもので，器面は滑らかであり，焼成は良好である。色調は褐色を呈する。

杯2類（3・4）　口唇部が1類と比べ大きく肥厚，外反し，口縁部より内彎しながら底部に至るものである。底部は1類同様な篦削りが見られ，底は篦調整で仕上げられている。整形は1類に比べ雑であり，器壁も薄く脆さを感ずる。胎土，焼成は普通で，色調は3が黒褐色，4が褐色を呈する。

杯3類（5・6）口唇部が内反り気味で，口縁部から略直線状に底部に至るものである。底部は台をもっているが，それほど顕著ではない。底は糸切底である。6には内外面にタール状の炭化物が付着している。胎土，焼成は普通で，色調は5が褐色，6が明褐色を呈する。

杯4類（7）　口唇部が僅かに内反し，口縁部よりは緩やかに内彎しながら底部に至るもので，底部は篦削り調整で仕上げられている。整形は入念に行なわれ，胎土，焼成は良好で，色調は褐色を呈する。

杯5類（8）　口唇部が内反気味で，口縁部で緩やかに，底部近くで急に内彎したものに高台の付いたものである。側線は轆轤整形による起休が顕著である。内外面に横位と花弁状の篦磨きが見られる。整形は入念に行なわれ，胎土，焼成は良好で，色調は褐色を呈する。

蓋（9・10）共に形態を把握するまでには至らないが，9の口縁部は鳥嘴状を呈し，内面には花弁状の篦磨きが見られる，整形は入念に行なわれ，胎土，焼成ともに良好で，色調は褐色を呈する。

皿（11～13）　口唇部が杯2類より一層外反した器高の低いものである。11，12の側線は轆轤整形による起伏が見られる。3個とも底部に杯1・2類同様な篦削りが見られ，底は篦調整が行なわれている。11の外面には墨書が見られるが判読は不可能である。胎土は普通であるが，器壁が薄く脆さを感ずる。焼成は普通で，色調は11が褐色，12，13は黒褐色を呈する。

甕（14・15）　共に口縁部が外反し，それ以下では緩やかに内彎して底部に至るものと考えられる。最大径は共に口縁部にあり，14は14.4cm，15は26.4cmを計る。14は外面に縦位の刷毛目痕が見ら

れずにすぎず，15では口縁部内側に横位，胴部外面に縦位，同内面に斜位の篦掻痕が見られる。胎土は砂粒を多く含み，焼成は普通で，色調は黒褐色を呈する。

釜（16）　外反する口縁部に略水平な鍔が取付けられたものだが，鍔以下は欠損している。内外面に刷毛目痕が見られ，胎土は砂粒を多く含み，焼成は良好で，色調は黒褐色を呈する。

小形土器（17・18）　轆轤整形による小形の土器であり，共に刷毛目痕が見られる他，18には胴部中央に一条の沈線が回っている。胎土，焼成とも良好で，色調は17が黒褐色，18が赤褐色を呈する。

⑵　須　恵　器

須恵器の器形は杯，蓋，甕形土器で，杯は更に４類に細別され，胎土，焼成は共に良好で，色調は灰色を呈する。

杯１類（19～20）口唇部が僅かに外反し，緩やかに外反する口縁部を経て高台に至るものである。

杯２類（21）口縁部が１類より更に直線的に外方に開くものである。

杯３類（22）側線が前二者よりも垂直に近いものである。

杯４類　図には示してないが，底が高台を付けたものでなく，糸切底のものをいう。

蓋（23～26）23は遍平な把みであり，24～26の口縁部は鳥嘴状を呈している。

甕（27・28）口縁部のみであるが内外面に暗緑色の自然釉がかかっている。

⑶　緑　釉　陶　器

高台付椀（29・30）　29は色調が胎土に鉄分が多く含まれていたために黄褐色を呈し，僅かに緑釉が見られるにすぎない。30も高台付椀の高台を考えられるものであるが，これは両面に若草色の緑釉が塗布されている。

⑷　灰　釉　陶　器

高台付椀（31・32）31は口唇部がやや外反するもので，内外面に白と灰色の灰釉が塗布されている。32は灰白色の灰釉がどぶづけの手法で塗布されている。

⑸　土製品（35）　布目平瓦の破片を用いてその四周を磨いたものである。

⑹　刀子（33）　鉄製の刀子で腐触が著しい。

⑺刀装具（34）　青銅製のさやどめ金具である。

⑻墨書土器　墨書は11の皿に見られる他，２片が検出されたが，判読可能なものは杯底部破片に書かれた「毛」だけであった。

⑼瓦　平瓦，丸瓦の破片がかなり多く出土しているが，他種のものは認められない。

１号住居址の特徴は，緑釉陶器と瓦及び墨書土器の存在と，他の住居址に比べて須恵器の出土量が多いことといえる。

2　第2号住居址内出土遺物

本住居址よりの出土遺物は図上復元可能な土師器７点，須恵器１点，灰釉２点の他に砥と鉄滓が見られる。

⑴　土　師　器

土師器の器形は杯，皿，甕，釜であるが，甕は破片のため図に示してない。杯は更に３類に細別できる。

杯１類（第11図１・２）口唇部が大きく外反し，口縁部より内彎して底部に至るものである。底部には時計と逆回りに篦削りが行なわれており，底は篦調整であり，１には糸切痕が残っている。器壁

が薄く脆さを感ずるが，胎土，焼成は普通である。色調は2が褐色，1は外面が黒褐色，内面が漆黒色を呈する。

杯2類（3・4）側線が略直線状に作られ，底は台が付いたものであるが，それ程顕著ではない。底は3が糸切底，4が糸切後に篦調整が行なわれている。4は極めて粗雑な整形状態を呈している。胎土，焼成は良好で，色調は3が明褐色，4が黒褐色を呈する。

杯3類（5）直線状に開いた杯に高台が付いたものである。胎土は普通で，焼成は須恵質に近い様で色調は白褐色を呈する。

皿（6）口唇部が杯1類に比べ更に外反した器高の低いもので，底部には杯1類同様の篦削りが行なわれており，底は篦調整で仕上げてある。胎土，焼成は良好で，色調は明褐色を呈する。

釜（7）内傾する口縁に略水平な鍔が取付けられ，鍔以下で内傾して底部に至るものと考えられる胴部には縦位の篦掻痕が見られる。胎土は砂粒を多量に含み，焼成は普通で，色調は黒褐色を呈する

(2) 須　恵　器

甕（8）底部のみであるが，恐らく甕であると考えられる。胎土，焼成とも良好で，色調は灰色を呈する。

(3) 灰 釉 陶 器

高台付皿（9）高台付皿の口縁部と考えられるもので，口唇部が僅かに外反している。灰白色の灰釉がどぶづけの手法で塗布したものである。10は椀か皿の高台であり，やはりどぶづけの手法で灰釉が塗布されている。

(4) 砥　(11) 四面をよく使用した跡が残っている。

(5) 鉄滓　住居址北西隅近くの片面から検出された。

(6) 土製品（12）土師器片を利用したもので，四周が磨かれている。

第2号住居址については，特徴らしきものは看取されなかった。

3　第3，4号住居址内出土遺物

第3及び4号址よりの出土遺物は図上復元可能な土師器4点，須恵器1点，緑釉陶器1点，灰釉陶器7点の他に，鉄製品，鉄滓であった。

(1) 土　師　器

土師器とは杯，耳皿，壺が見られる。

杯（第12図13・14）杯の側線が略直線状に形成され底部に至るものである。底部は小さな台をもっているが，それほど顕著ではない。13は整形が雑に行なわれている。胎土，焼成は良好で，色調は14が褐色，13は外面が漆黒色，内面が赤褐色を呈する。

耳皿（15）側線が緩やかな膨みをもった皿部に高台が付されたもので，底は糸切底である。皿を作ってから両端を指で押さえ，内側に折り込んだものである。内外面に刷毛目痕が見られる。胎土，焼成ともに良好で色調は褐色を呈する。

壺（16）小形の壺形土器であり，内外面に刷毛目痕が見られ，底は糸切底である。胎土，焼成は良好で，色調は褐色を呈する。

(2) 須　恵　器

蓋（17）把りの部分を欠いているが，口縁部は鳥嘴状を呈する。胎土，焼成は良好で，色調は灰色を呈する。

(3) 緑釉陶器（18）椀の高台部と考えられるもので，深緑色の緑釉が両面全体に布布されている。胎土，焼成は良好である。

(4) 灰釉陶器

灰釉陶器には高台付椀及び高台付皿の器形が見られる。

高台付椀（19～22・25）口唇部が19は僅かに外反，20，21，25が大きく外反，22が内反気味をし，口縁部から緩やかに底部に至り，高台を付けたものである。19，20，21，25は灰白色の灰釉が，どぶづけの手法で塗布されているが，22は細片のため不明である。19～21には口縁部に篦で引掻いてできた様な凹部が数個見られる。

高台付皿（23・24）23は口唇部が大きく外反，24は内反するやや小形のものである。灰釉は23がどぶづけの手法で塗布されているが，24は不明である。又，26～29は灰釉陶器の高台である。

(5) 鉄製品（30）鉄製品であるが，断片であることと，錆が著しいことにより，何なのか不明である。

(6) 鉄滓　覆土内より１個の出土を見た。

３・４号住居址の特徴は緑釉陶器と，やや多量の灰釉陶器の出土したこと，耳皿や，小形壺が出土したこと，意識的に底部周辺を打ち割った底が多く出土したことがあげられる。

4　第５号住居址内出土遺物

第５号址よりの出土遺物は復元可能な土師器６点，須恵器１点の他に，墨書土器片が見られる。

(1) 土　師　器

器形は杯，皿，甕，鉢などが見られる。

杯（第13図１・２）口唇部が僅かに外反し，口縁部より緩やかに内彎しながら底部に至るもので，底部には時計と逆回りに篦削りが行なわれている。底は１が篦調整で仕上げられ，２は糸切後に篦調整がされたもので，一部に糸切痕が残っている。内面には共に花弁状の篦磨きが見られる。整形は入念に行なわれ，胎土，焼成も良好で，色調は褐色を呈する。

皿（３）口縁部が内反気味で，緩やかに底部に至るもので，底は篦起しである。整形，胎土，焼成ともに良好で，色調は黒褐色を呈する。

甕（４・５）口縁部が外反し，胴部は緩やかに内彎して底部に至るものと考えられる。４は輪積によって作られたものである。共に外面には縦位の篦掻痕が，４の頸部に篦で削り取った痕が見られる他，４の内面にも横位の篦掻痕が見られる。胎土は共に砂粒を多く含み，焼成は良好で色調は黒褐色を呈する。

鉢（６）口縁部が内反し，それ以下では略直線状をなして底部に至るものであり，胴部外面には縦位，内面には横位の篦掻痕が見られる。胎土は砂粒を多く含み，焼成は良好で，色調は黒褐色を呈する。

(2) 須　恵　器

蓋（７）把のみである。

(3) 墨書土器片，土師器の杯片に墨書の見られるものがあったが，判読は不可能である。

特徴的にはこれと言ったものを上げることはできない。

4　C～１グリッド内出土遺物

C～１グリッド内よりの出土遺物は図面復元可能な土師器２点，灰釉陶器１点である。

(1) 土 師 器

杯（第13図８・９）口唇部が外反し，口縁部以下は略直線状で底部に至るものである。底は篦調整が行なわれているが，ほとんど糸切痕を残している。胎土，焼成とも良好で，色調は８が黒褐色，９が褐色を呈する。

(2) 灰 釉 陶 器

高台付皿（10）高台付皿の口縁であり，灰白色の灰釉がどぶづけの手法で塗布されている。

以上，各住居址出土遺物の特徴を記述してきたが，各住居址の中でどのような関連性があるか気のついた点をあげてみよう。

第１号址の杯１類と第５号址の杯１類とは同形態で，しかも内外面の篦磨き，篦削りという同じ整形方法で作られており，時期としては同時期のものと考えて差しつかえあるまい。又，第１号址の杯２類及び皿と，第２号址の杯１類と皿とが，第１号址と第２号址の関係の如く同形態，同整形であることから１号址と２号址とは同時期に置かれてよいだろう。このことから，１号址，２号址及び５号址は略同時期の所産であることが考えられる。３・４号址の時期については３・４号址が２号址を切って構築されていることから３・４号址が新しく，１・２・５号址が古い時期のものであることが理解できる。しかし，この２のグループの間にはそれほどの時期的なずれはないものと考えられるが，陶器についてみるとさらに明確にされるのではないだろうか。即ち，緑，灰釉陶器が一つの手懸りとなるであろう。

第１号及び３・４号出土の須恵器杯蓋の口縁部形態は奈良朝以前のものと違って「く」の字形をとり，その時期は凡そ10世紀以降と考えられる。第１号址の須恵器台付杯は台の脚部の形態から猿投山須山須恵器の編年の第二期後半から第三期前半に比定され，その実年代は10世紀後葉から11世紀中葉にむかれるものであると思う。第１号址の緑釉陶器・高台付椀の時期は，前編年の第三期前半の11世紀中葉以前に比定され，これより１号住居址は10世紀後葉から11世紀初頭に中心が置かれるものと考えられる。第３・４号址出土の灰釉陶器・高台付椀の脚部形態は28が第三期前半の10世紀末葉，19・27・29は第四期（12世紀）に近い形態をとり，26は第３期前半（10世紀末葉）以降に置かれよう。又灰釉陶器ではないが耳皿が出土しているが，猿投山古窯址においては10世紀末葉あたりから見られるのであり，この耳皿も10世紀末葉以降に比定されよう。これより第３・４号址の時期は10世紀末葉から11世紀初頭に中心が置かれるものと考えられる。これからも第１号址の方が，第３・４号址より若干古出の時期であることが窺えよう。

よって，本遺跡の実年代は10世紀後葉から11世紀初頭に置かれるもと言えのではあるまいか。

第１号址の緑釉陶器第10図28は長野県松本市周辺にのみ現在は知られていないといわれているがその産地は目下のところ明らかではない。同じく緑釉陶器（同29）は，愛知県の鳴海古窯，同じく灰釉陶器（同30）は，静岡県小笠郡の清谷古窯，同じく灰釉陶器（（同31）は，岐阜県恵那市の永田古窯でそれぞれ生産されたものと考えられ。第３・４号址の緑釉陶器（第12図18）は，愛知県小牧市・篠岡窯，灰釉陶器（同19）は，岐阜県恵那市の美濃古窯址群で，同じく灰釉陶器（20，21，23，25～29）は，永田古窯で生産されたものと考えられる。

本遺跡出土の陶器は以上のように鳴海古窯，美濃古窯址（永田古窯を含む），篠岡古窯及び清谷古窯に生産されたものと考えられ，鳴海古窯，篠岡古窯及び清谷古窯のものは各１点と，永田古窯製品のそれに比べて極めて少ない。又本遺跡からは，隣接長野県下に濃厚に分布している陰刻花文系

陶器は一片も出さしていない。ただ近接の石和町々営住宅造成地からは四弁花文を有する猿投製品の出土が注意されているところから，精密に遺構に伴う出土品の点検をした結果をふまえなければならないが地域の竪穴住居には各々個性があるかも知れない。④長野県下調査ではその多くが明らかであり参考となる点がすこぶる多い。

本論については直接私共かけ出しの研究者に担当者山本寿々雄氏を通して手厚いご指導をたまわった名古屋大学の楢崎彰一先生先生には深く感謝しなくてはならないし空白の多いこの種の調査研究に大きな手がかりを得ることが出来たことを心からお礼申し上げたい。（**菊島美夫**）

緑釉及び灰釉陶器出土地名表（山本寿々雄，菊島　美夫　1972／谷口　一夫，小林　広和）

	出土地		判出遺物	備考
1	東八代郡一宮町末木	緑釉陶器，灰釉陶器	土師器，須恵器	本報告参照
2	〃　御坂町八千蔵	灰釉陶器	土師器，須恵器	表採菊島美夫蔵
3	〃　石和町英小字上平井	緑釉陶器，灰釉陶器		表採山本寿々雄氏蔵
4	韮崎市清哲町	灰釉陶器	土師器	韮崎市教育委員会蔵
5	富士吉田市船津上ノ段	灰釉陶器		富士スバルランド建設に伴って出土
6	都留市美通	灰釉陶器	土師器	都留市教育委員会蔵
7	北巨摩郡白州町竹宇	灰釉陶器	土師器	名執武三郎氏蔵
8	韮崎市藤井町	灰釉陶器	土師器	藤井小学校蔵

5 ま と め

以上各項について，遺構，出土遺物の特徴についてふれたのであるが，歴史時代における聚落落の調査が各地において実施され，多くの成果が報告されている時，ここに標高280～360メートルの扇状地帯特に甲斐国分寺，同尼寺の中間地域の一部の調査の結果がまとまったのであるが，散在している竪穴がとらえられたこと。そして緑釉陶器，墨書土師器，国分寺瓦，鉄滓などの出土が確められていることは今後の甲斐国分寺寺域周辺調査に手がかりを得たこととなろう。緑釉陶器や字を書くことの必要性は何から発生しているのだろうか。国分寺瓦や鉄滓がどうして伴出しているのだろうかとする考え方が普通に存在する民衆そのものとは区別されてよいだろうし，何等かの形で生産にその一部が結びついているのかも知れない。文献とのつながりがつけにくいこの時期の資料だけにその意義は大きいものがあるわけであり，いろいろな問題を提起していくことであろう。例えば真疑の程は定かではないが，若し1部伝えられるようなこの時期に等しい製鉄址が塩山市内に存在していたとすれば岩木山麓（青森県西津軽郡鰺ケ沢町大館森山）における製鉄址の炉のような，幅約80センチメートル長さ1メートル，深さ60～70センセメートル，底面20～30センチメートルに木炭や鉄滓を敷き，側壁は鉄滓やスサ入りの粘土でつんでいるようなものが当然あったのであろうし対比が出来よう。その外にも原料やその技術なども当然考えられてこよう。もっとも陶器についてもいろいろと考えられてくる。発掘調査によって得られた緑釉陶器の中には鳴海窯のもの，篠岡窯のもの，窯元不明のものなどがあり，特に鳴海窯のものは，北は⑤多賀城（宮城県多賀城町）にまで見られるようにその経路も当然考えられるであろうし従来，緑釉陶器，灰釉陶器についての分布の実態が不明確な状況の山梨にあって，発掘資料としてとらえられている事実はまことに重要である。

長野，岐阜両県境にある神坂峠の発掘調査に関連して名古屋大学楢崎彰一助教授にご教示を得，山梨県下の，猿投，尾北中津川などの古窯址群で焼かれた陶器類の分布を古道に沿って追求してみようとの呼びかけに，ようやく応えられることとなったわけでありその学恩に深謝しなければならない。

そしてさらには，静岡県小笠郡笠原村清谷のものに類似する陶器の分布圏にも手がかりを得られることとなったのであり，古窯址についての各地の研究が進み，その生産地の拡大の様相が逐次明らかにされてきている現在，これら地方との流入経路を知ることは，地域社会の歴史的発展の姿をとらえるうえの手がかりが得られようし文献を欠如しているこの時代の空白が一歩一歩ほぐされてゆくことにかかせない物的な実左品としてその一片一片が貴重な存在となってくる。

次に最近明らかとなってきている群馬県の例のように⑥国分僧寺と尼寺の中間地域で「東院」と呼ばれる建造物の外，関係ある竪穴が40戸ほど発見されている事実にも照らして，この末木両ノ木神社周辺の竪穴もあるいはそのようなものの一部にあてはまるものなのかも知れないことである。そして竪穴住居址における例えば，ダブリの法則というようなものがあるものとすれば，それはたしかに4号址が3号址を切って構築されている事実からいいあらわさせるであろうし，伴出の遺物によっての差違を一応時期的に考えてみたところである。国分両寺域の周辺にかかる事実のあることによってこの地域つまり末木，東原，国分あるいは石和町，御坂町などはかけがえのない歴史的環境である。

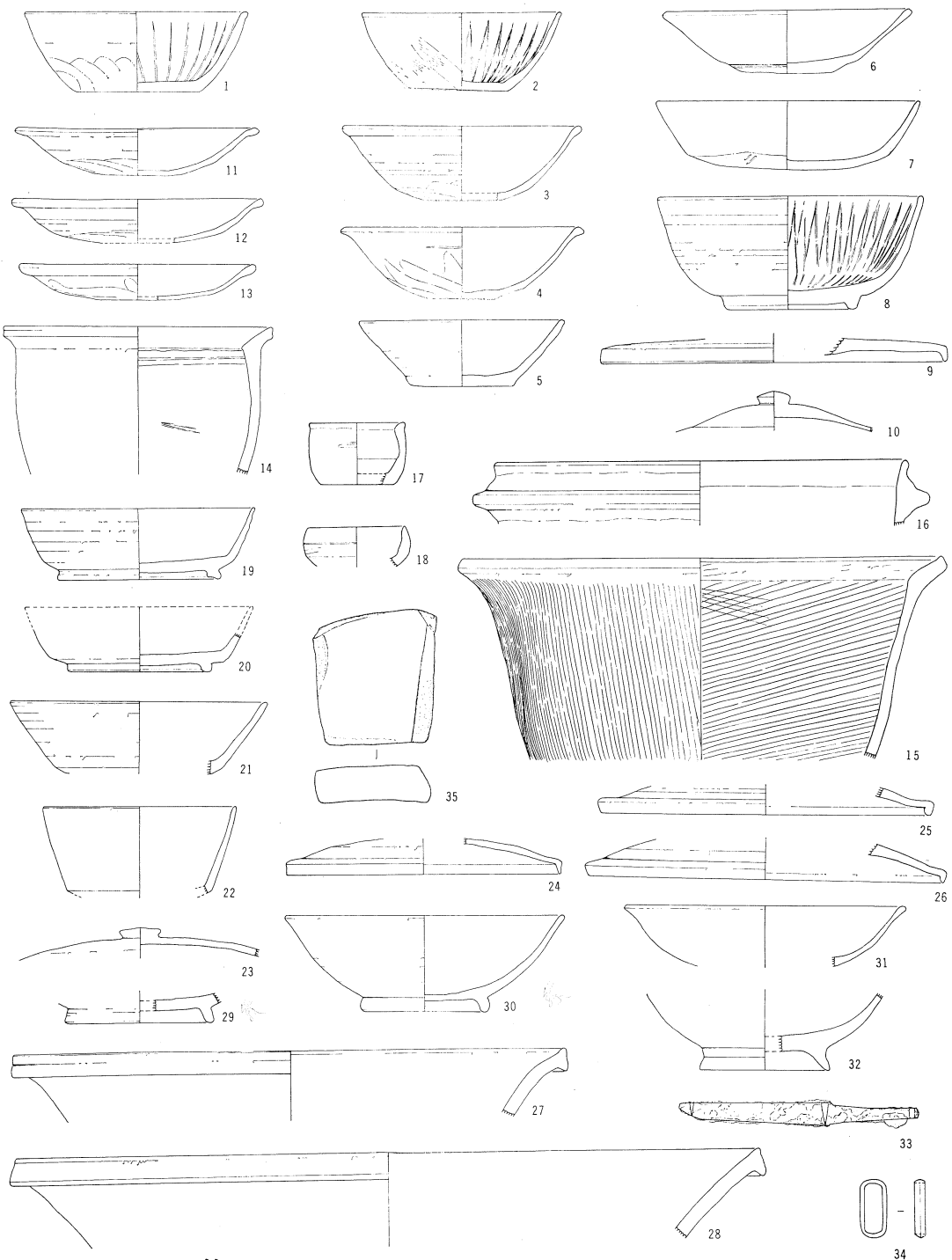
緊急調査が幸い既設道路の一部拡幅であり開発に伴う破壊が現在のところ広がっていないが，すでに前節でものべているような緊急に面としての保護対策を講ずべき時期でもある。

そしてこれ等の竪穴住居址の時期が10～11世紀にかけてであり，勿論国分両寺が機能的に活動しているからこそ，そこに住む竪穴住居の中に瓦も伴出したものであろう。このような瓦については，今後この種時期の竪穴住居址の中にどのような形で伴ってくるかは興味ある問題の一つとしたい。無限にその遺跡が存在するのではないのであって，破壊に伴う緊急調査ではあっても，学問的な必然性をもつものとして今後の調査に立向いたいものである。出土遺物の中で特に愛知県下や静岡県下の古窯に見られるものと同一なものが今後も発見されることであろうしまたそのような事に特に注目したいし今回の調査にあたり名古屋大学の楢崎彰一氏のあたたかいご教示によるところが大であることを付記しなければならない。そして同氏による古代・中世の陶瓷史年表をしばらく見つめ，愛知県下の古窯址の分布状況を念頭に入れ古代甲斐国の歴史にうえに何があり，どのようなことが波及してきたのか静かに考えてみたいと思うのである。

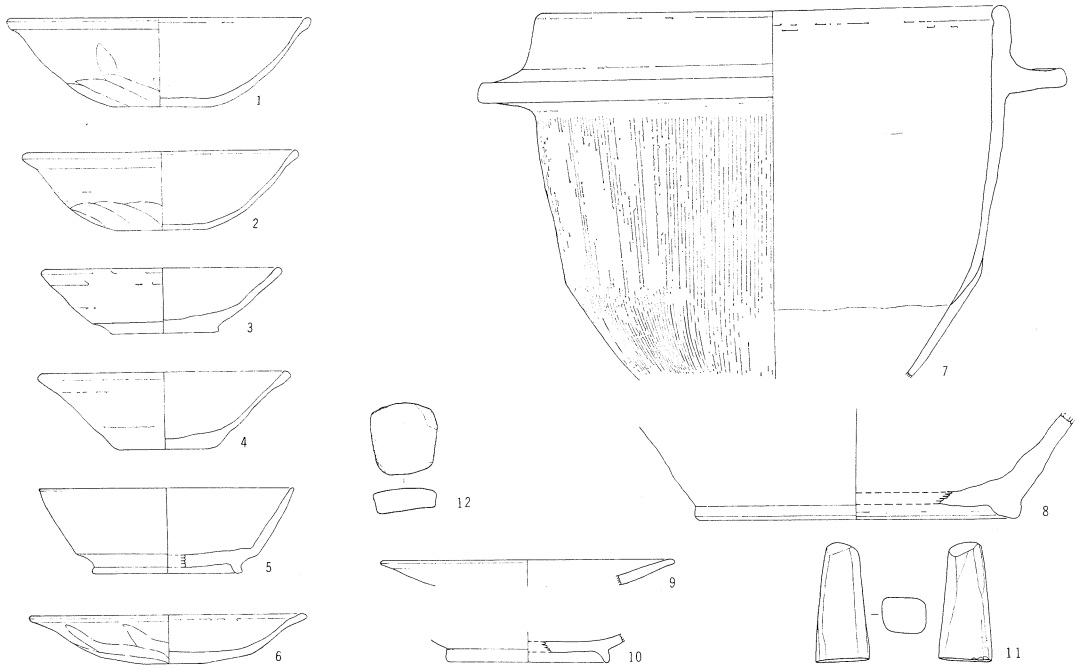
なお今回の成果が聚落と条理遺構，荘園と聚落遺構など御坂町～八代町～石和町を広く含めた地域への解明の手がかりとなれば幸であり，そのことは政庁の位置確認など考古学的調査に期待するところが多大であるからである。（**山本寿々雄**）

参　考　文　献

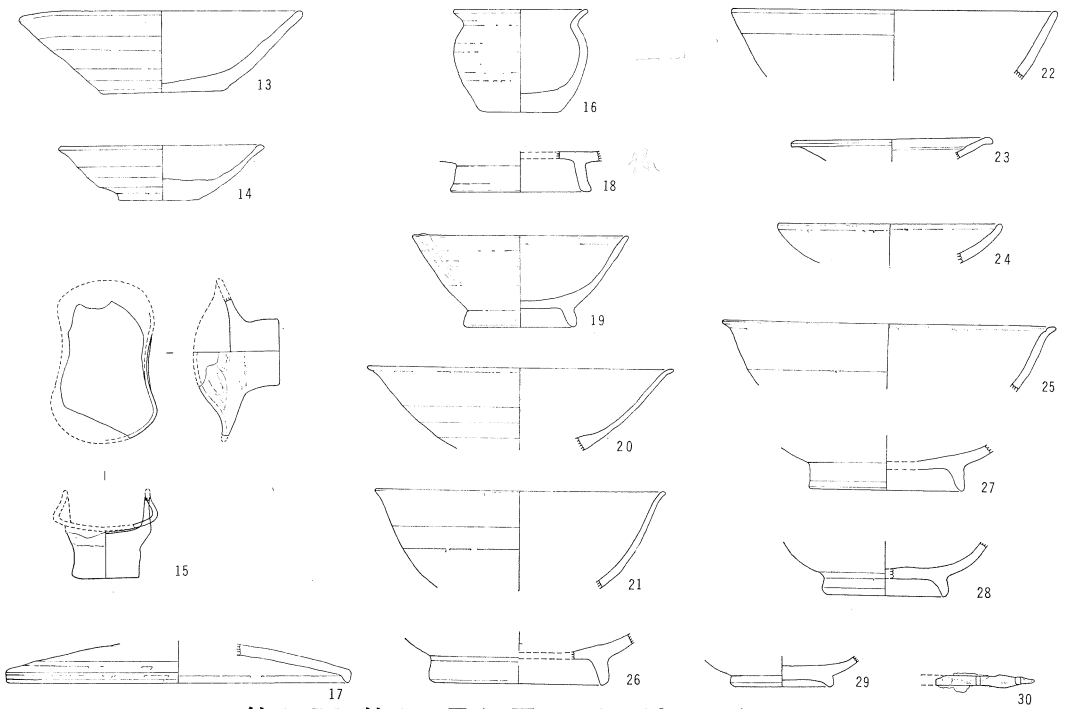
① 大場磐雄外	平出	平出遺跡調査会	1955
② 小出義治外	山梨県日下部中学校校庭聚落遺跡概報	上代文化19	1950
③ 山本寿々雄	「一宮町」	前掲書	1970
④ 楢崎彰一	瓷器の道 (1)	名古屋大学文学部20周年記念論文集	1968
⑤ 宮城県教育委員会	多賀城跡調査報告 (1)		1970
⑥ 松島栄治	群馬県の国分寺遺跡について	前掲書	1971



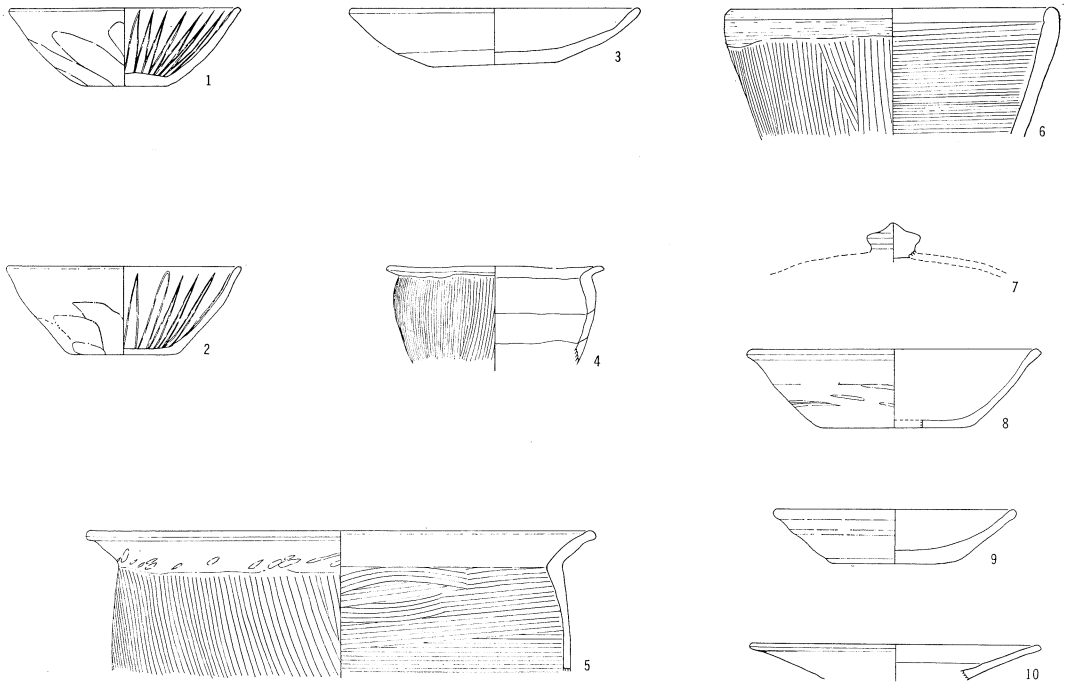
第10図・第１号住居址出土遺物



第11図・第２号住居址出土遺物

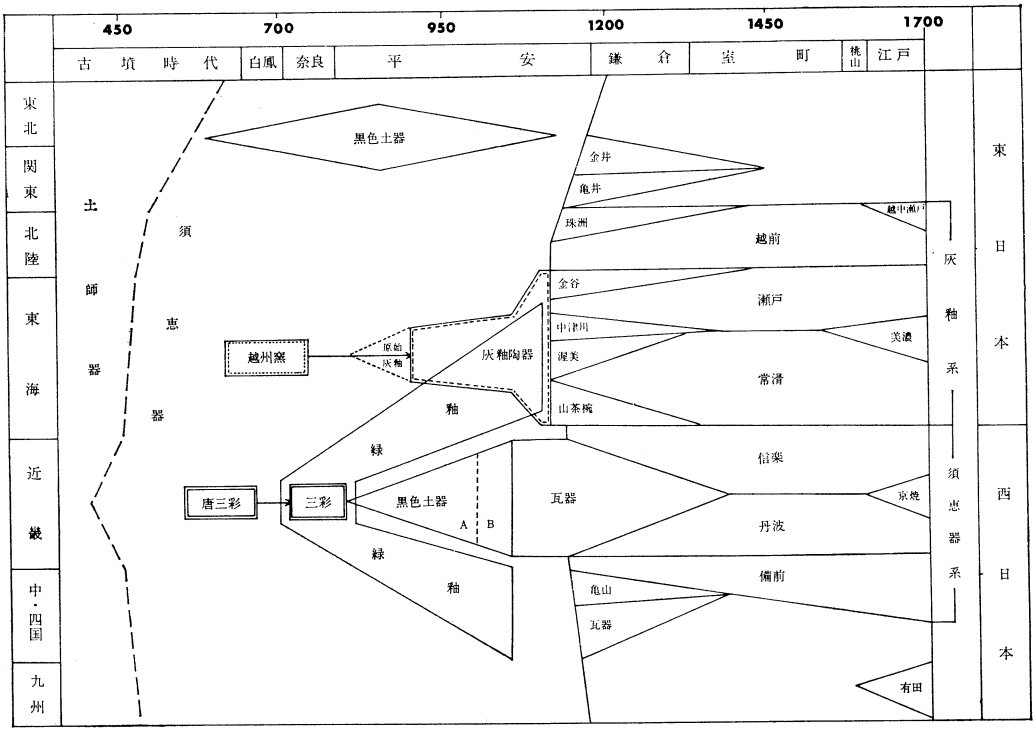


第12図・第3・4号住居址出土遺物



第13図・第5号住居址出土遺物

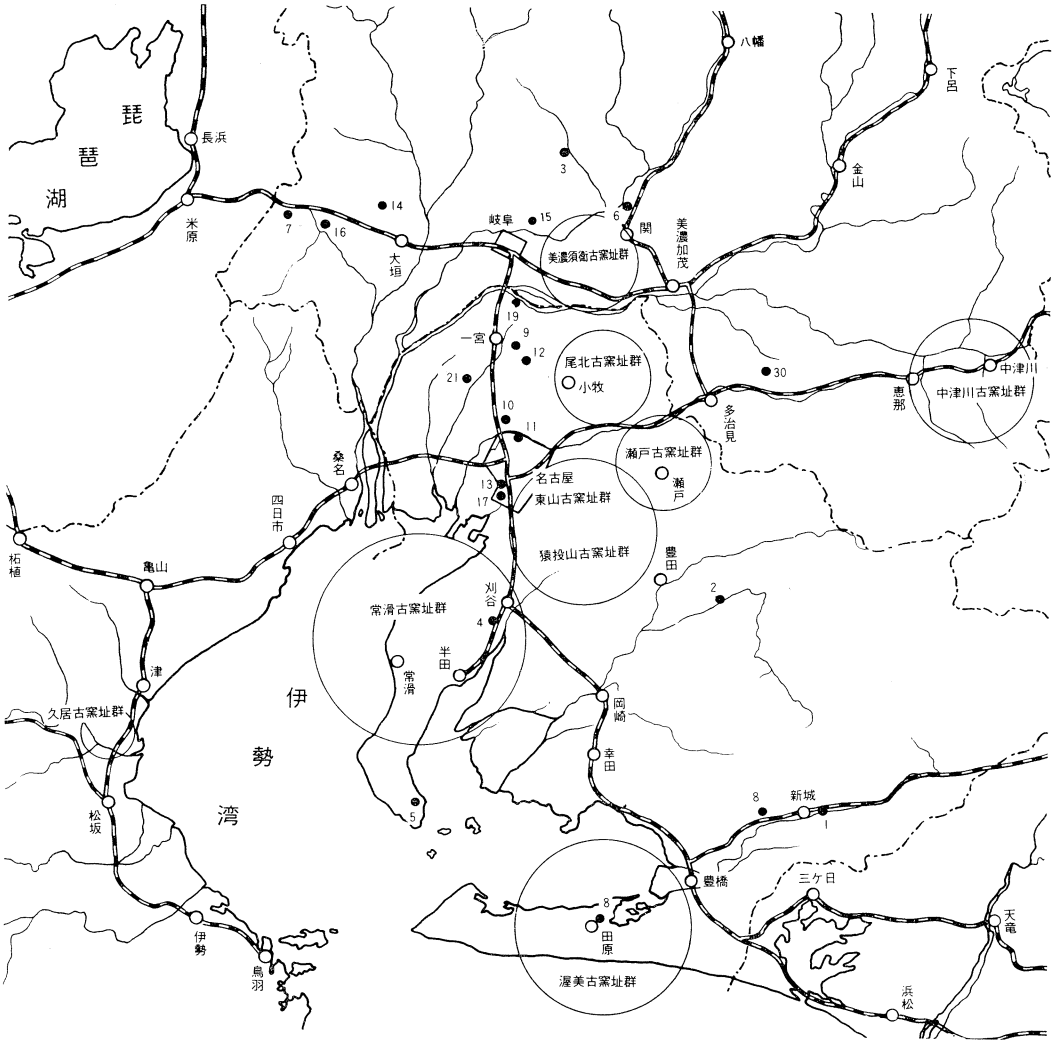
古代・中世陶瓷史年表



発掘担当者	山本寿々雄　谷口一夫	
同　調査協力者	塩島由喜男	川崎昌宏
	森本圭一	山崎金夫
同　（立正大学）	小林広和	田中雅信
	菊島美夫	
同（都留文科大学）	山本正則	竹内清志
	里村晃一	小林恵子
	田中文江	服部弘栄
同　（明治大学）	倉鹿野あつ子	
（山梨大学）	考古学研究会の一部参加見学	

愛知県下における先土器文化～古窯の分布

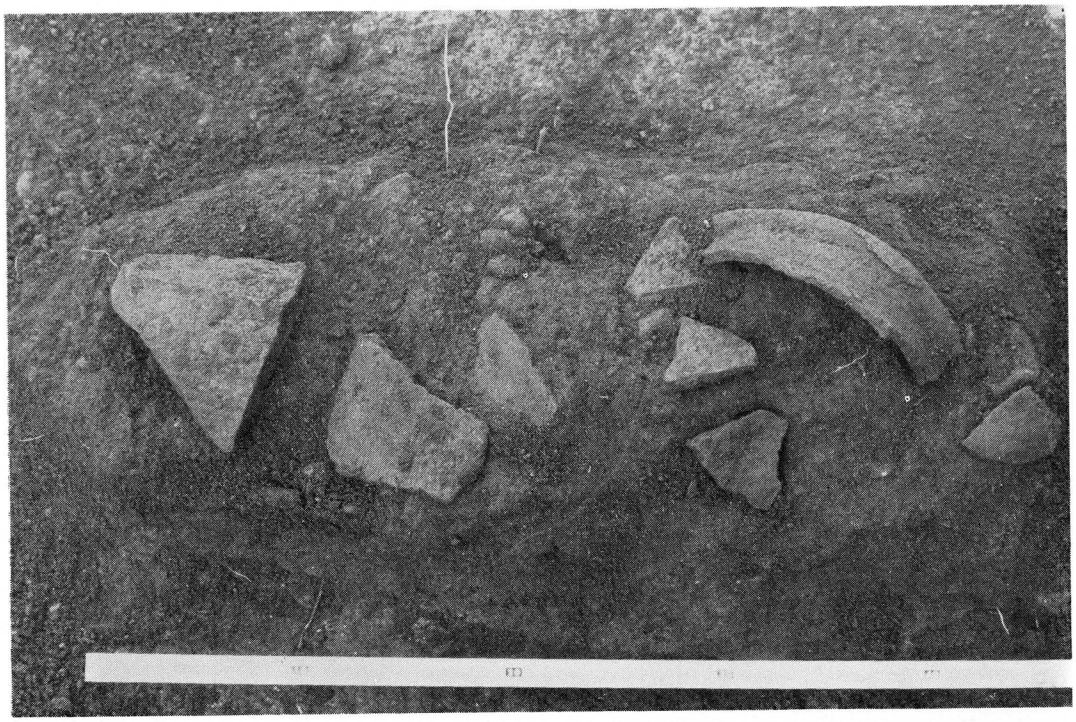
（名古屋大学文学部考古学研究室）



① 萩平遺跡	S 37発掘	無土器時代	
② 酒呑遺跡	S 41発掘	縄文早期	
③ 九合洞窟	S 25発掘	縄文草創期	
④ 入海貝塚	S 23発掘	縄文早期	
⑤ 天神山遺跡	S 30発掘	縄文早期	
⑥ 塚原遺跡	S 29発掘	縄文中期	
⑦ 中野遺跡	S 37発掘	縄文中期	
⑧ 吉胡貝塚	S 26発掘	縄文晩期	
⑨ 馬見塚遺跡		縄文晩期	
⑩ 貝殻山貝塚	S 29発掘	弥生前期	
⑪ 西志賀貝塚	S 23発掘	弥生前期	
⑫ 大地遺跡	S 26発掘	弥生中期	
⑬ 高蔵貝塚	S 26発掘	弥生後期	
⑭ 遊塚古墳	S 36発掘	古墳前期	
⑮ 龍門寺古墳	S 36発掘	古墳前期	
⑯ 牧田古墳群	S 34発掘	古墳後期	
⑰ 高蔵古墳群	S 28発掘	古墳後期	
⑱ 炭焼古墳群	S 27発掘	古墳後期	
⑲ 浅井古墳群	S 33発掘	古墳後期	
⑳ 久居古窯	S 38発掘	古墳後期	
㉑ 尾張国分寺址		奈良	
㉒ 美濃須衛古窯		古墳～平安	
㉓ 尾北古窯	S 32発掘	古墳～鎌倉	
㉔ 東山古窯	S 32発掘	古墳～鎌倉	
㉕ 猿投山古窯	S 30～37発掘	古墳～鎌倉	
㉖ 瀬戸古墳	S 37発掘	平安～現代	
㉗ 常滑古窯	S 34～37発掘	平安～現代	
㉘ 渥美古窯	S 40～41発掘	平安～鎌倉	
㉙ 中津川古窯	S 33発掘	平安～室町	
㉚ 元屋敷窯	S 33発掘	桃山	

第1図版

1 号 住 居 址 全 景



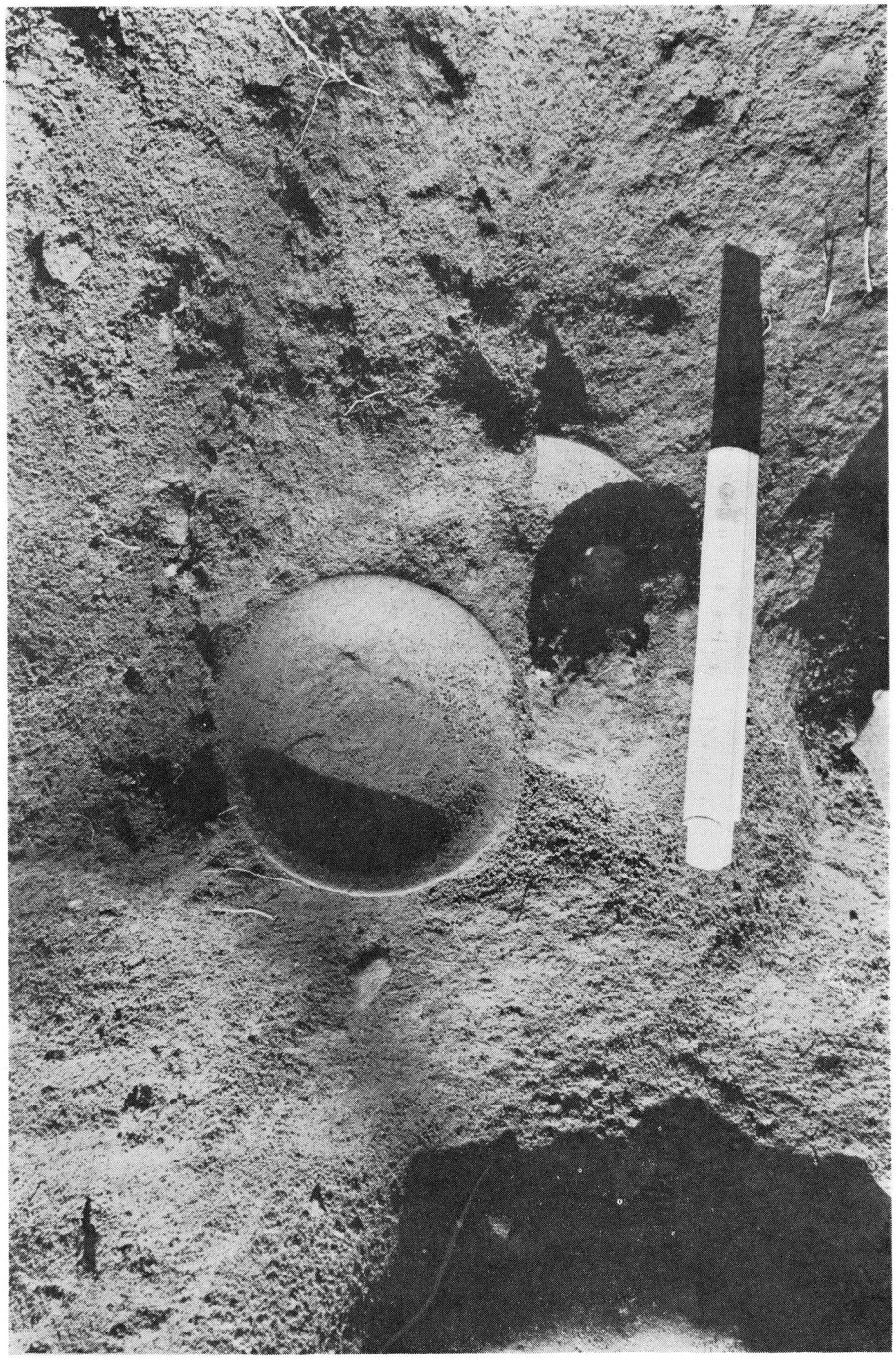
1号住居址瓦及びカメ出土状況

第2図版

1号住居址　刀子出土状況

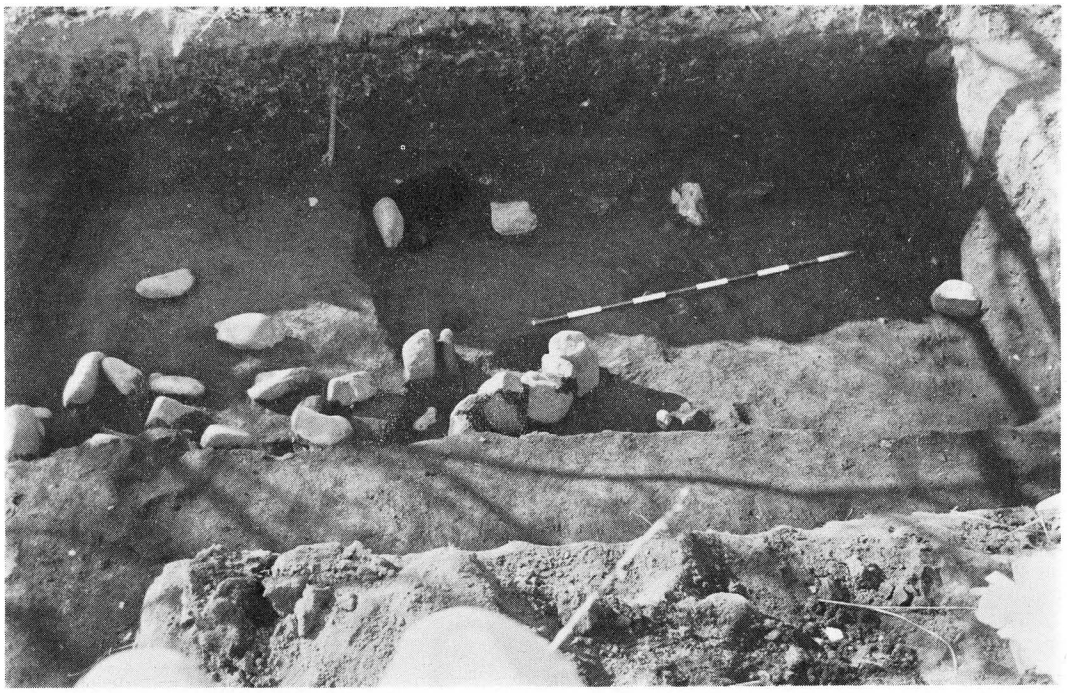
2号住居址全景

第3図版

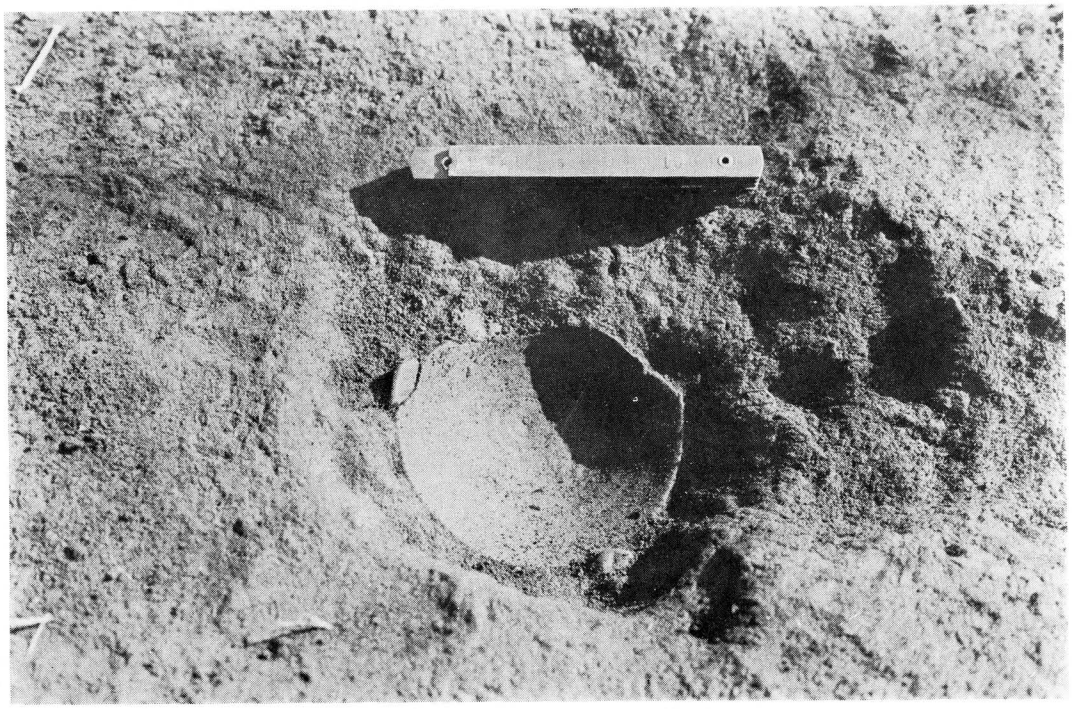


2号住居址　鉄滓及び皿出土状況

第4図版



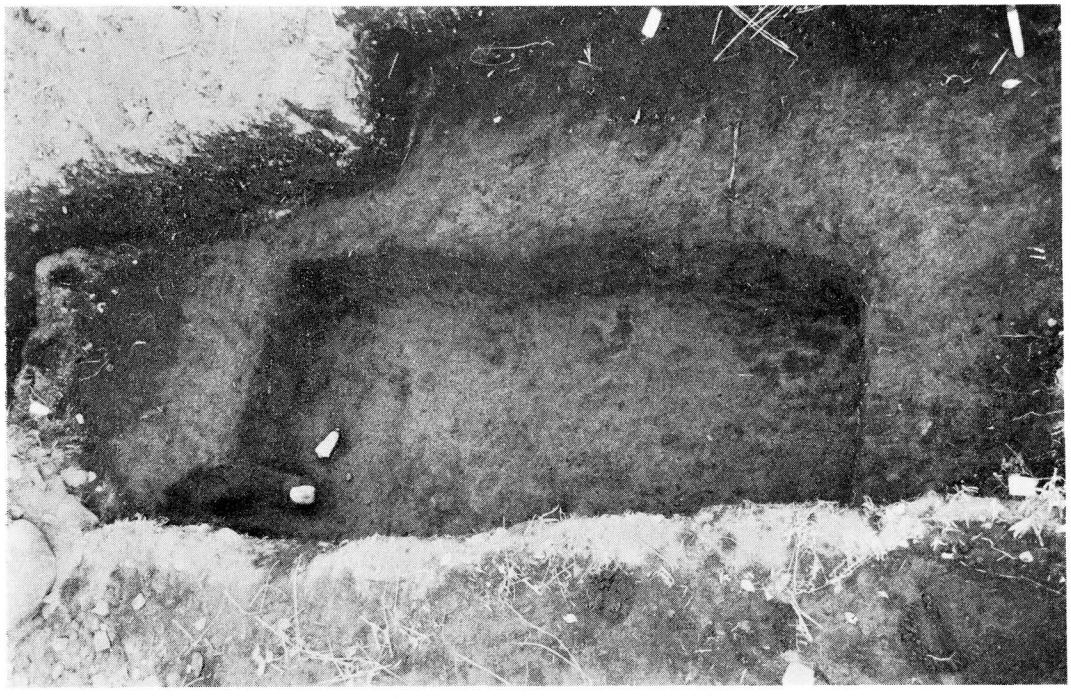
3・4号住居址全景



3号住居址皿出土状況

第5図版

耳皿出土状況

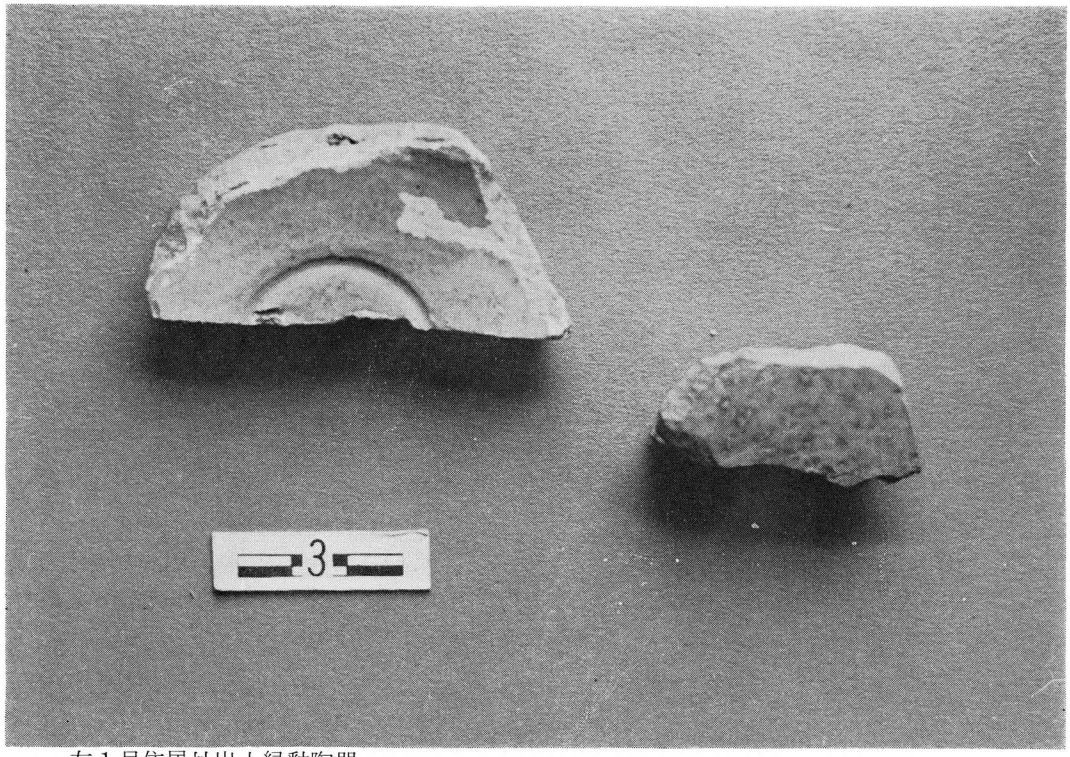


5号住居地全景

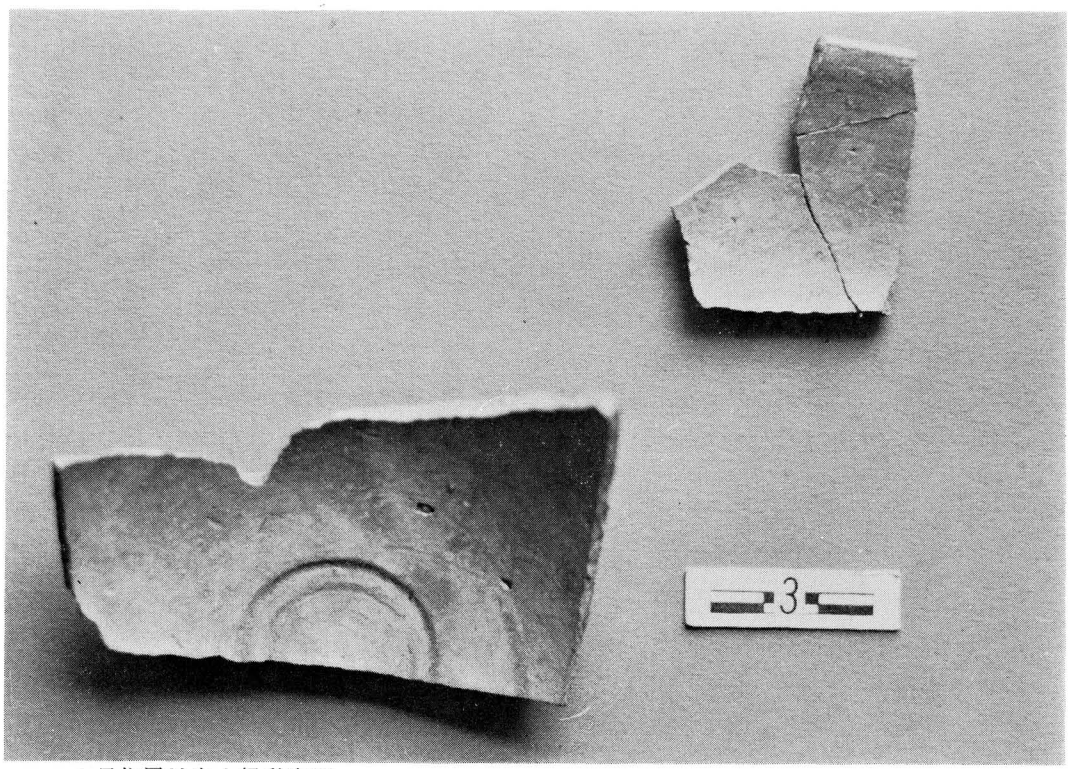
第6図版

5号住居址　皿及びカメ出土状況

第7図版

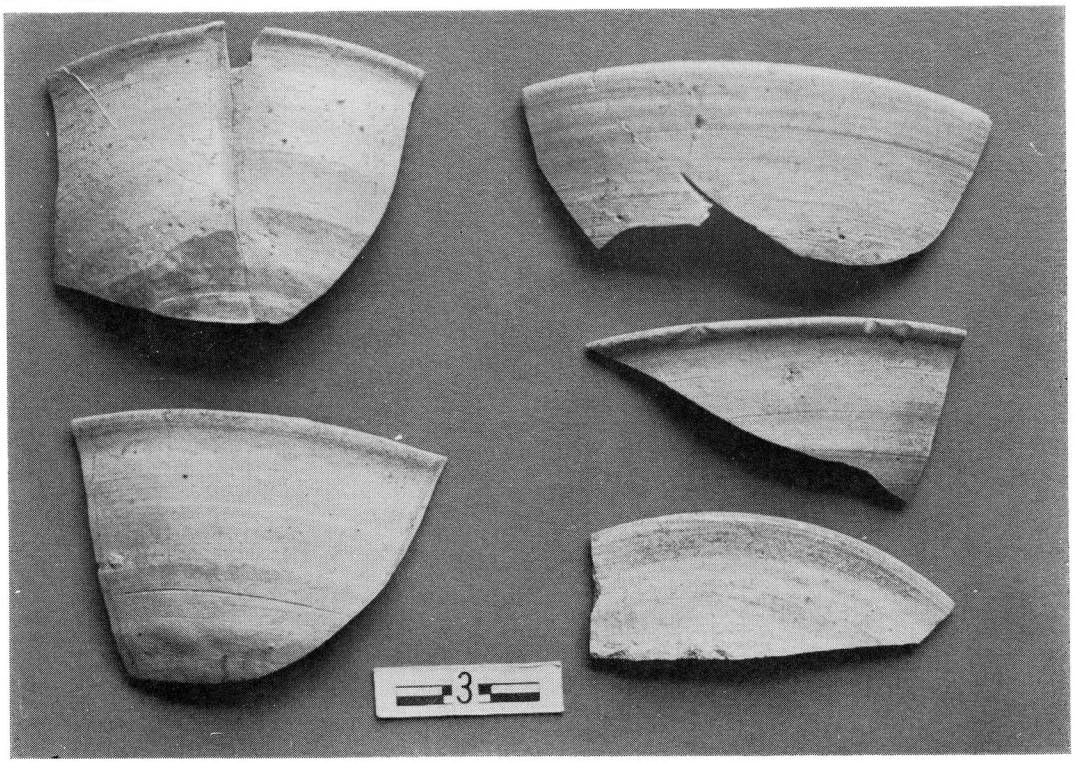


左1号住居址出土緑釉陶器
右3号　〃　〃

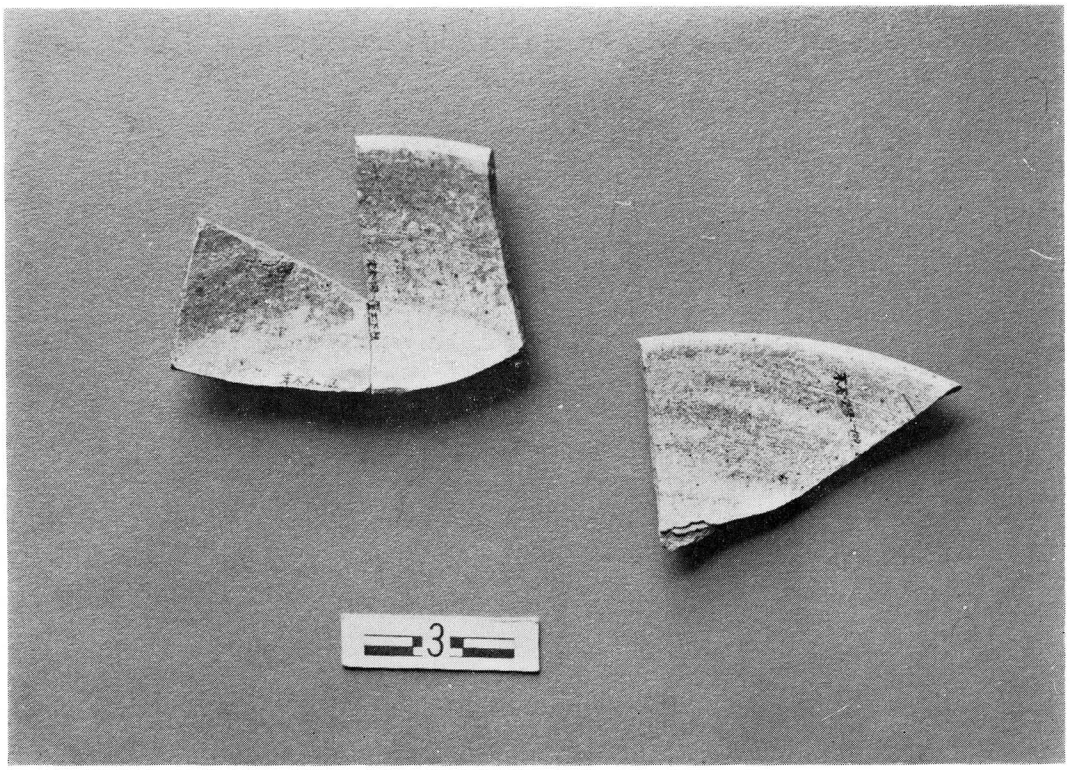


1号住居址出土緑釉陶器

第8図版

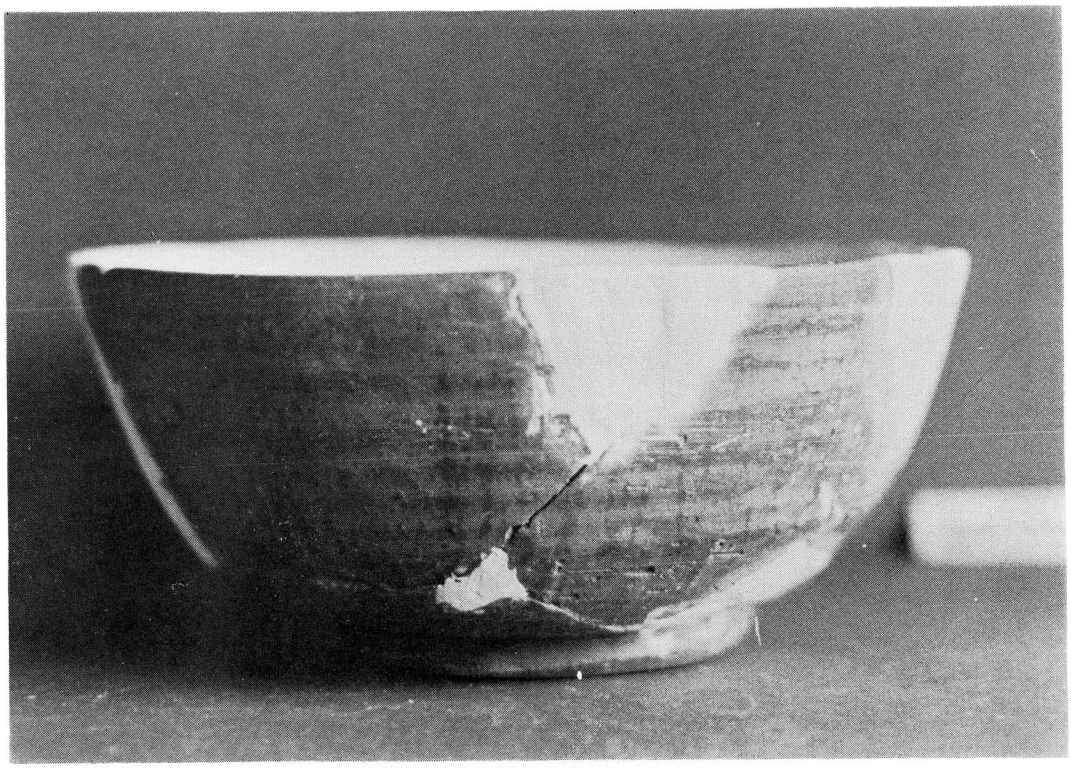


3・4号住居址出土灰釉陶器



1号住居址出土灰釉陶器

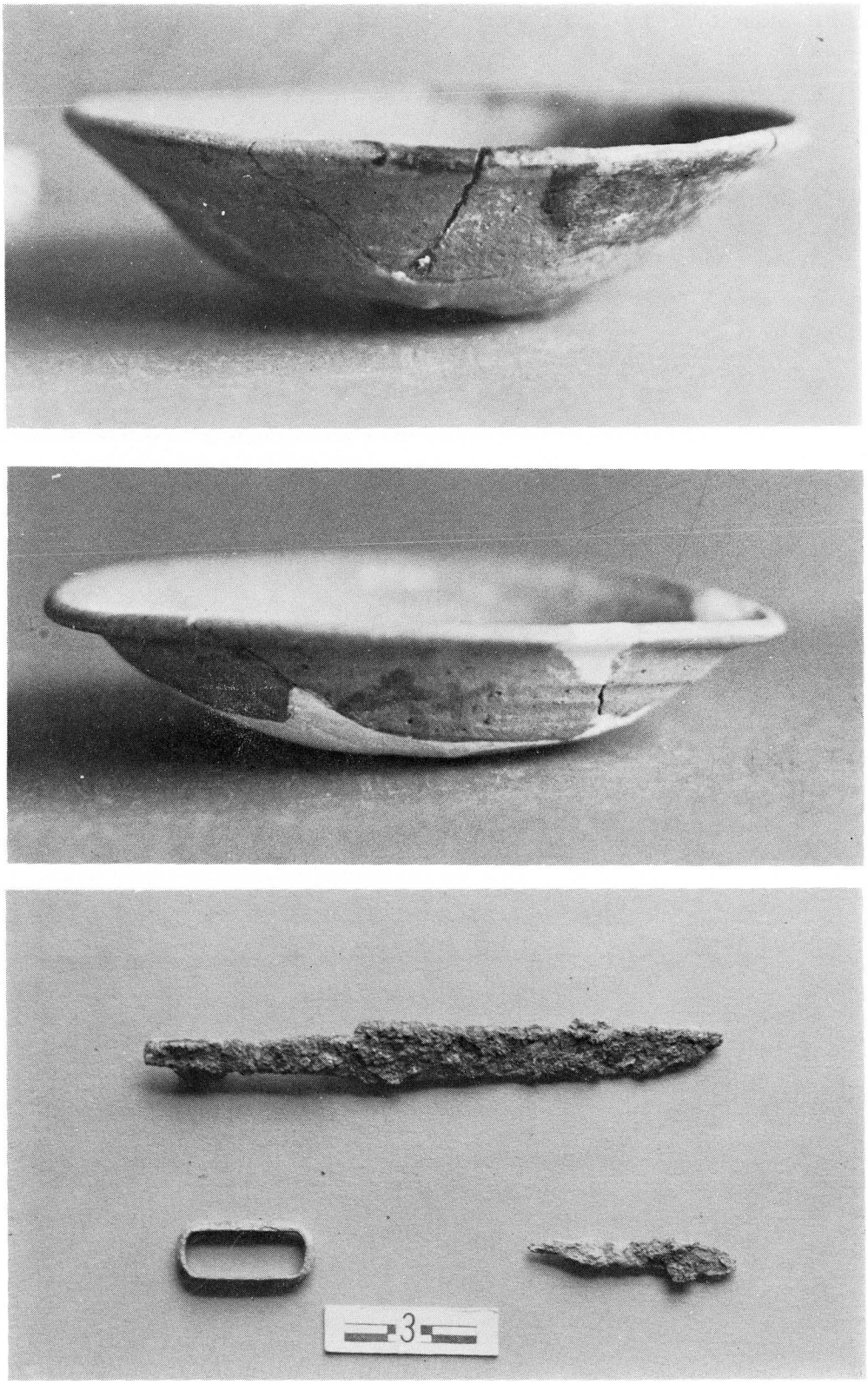
第 9 図版



1 号住居址出土土師器

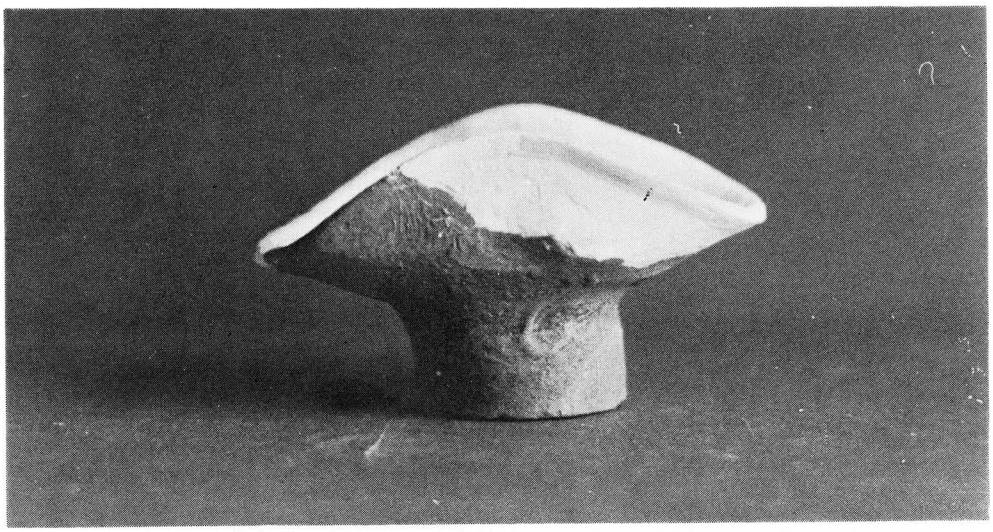
1 号住居址出土土師器

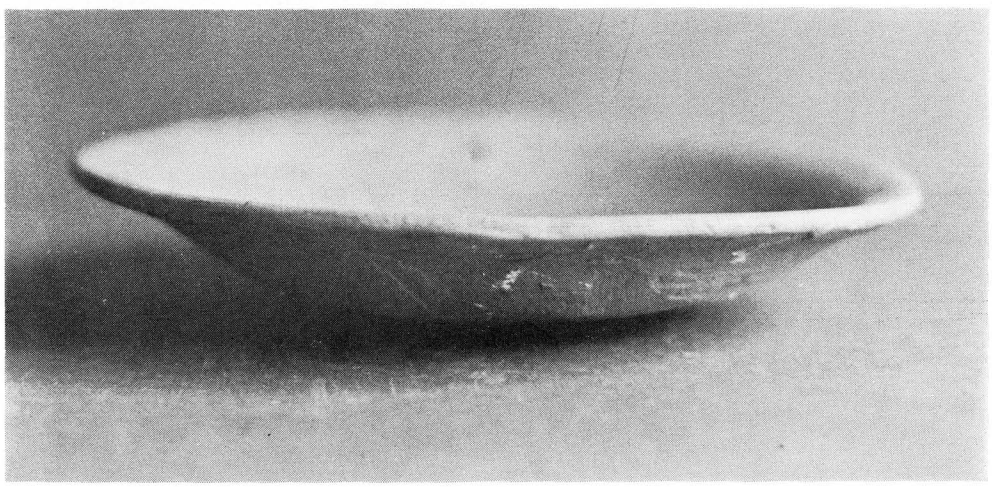
第10図版



上　1号住居址出土土師器（炭化物付着）
中　1号住居址出土土師器
下　刀子，刀装具，鉄器片

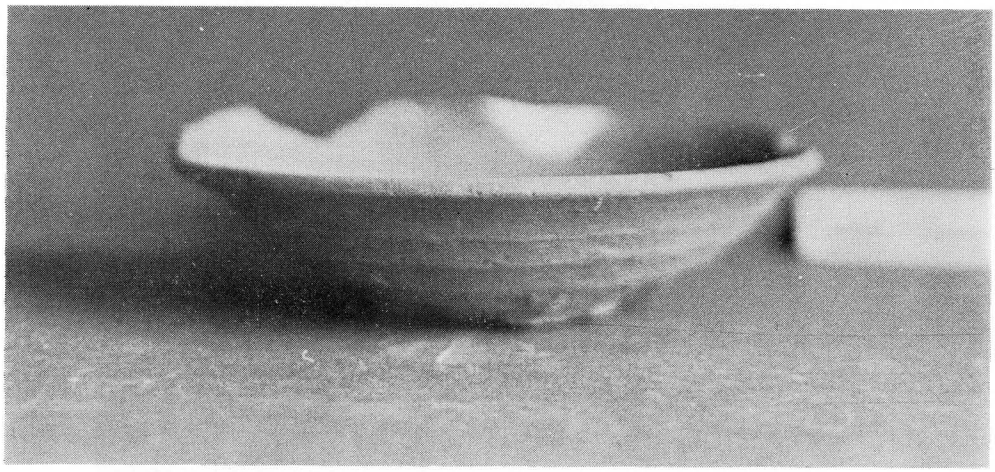
第11図版

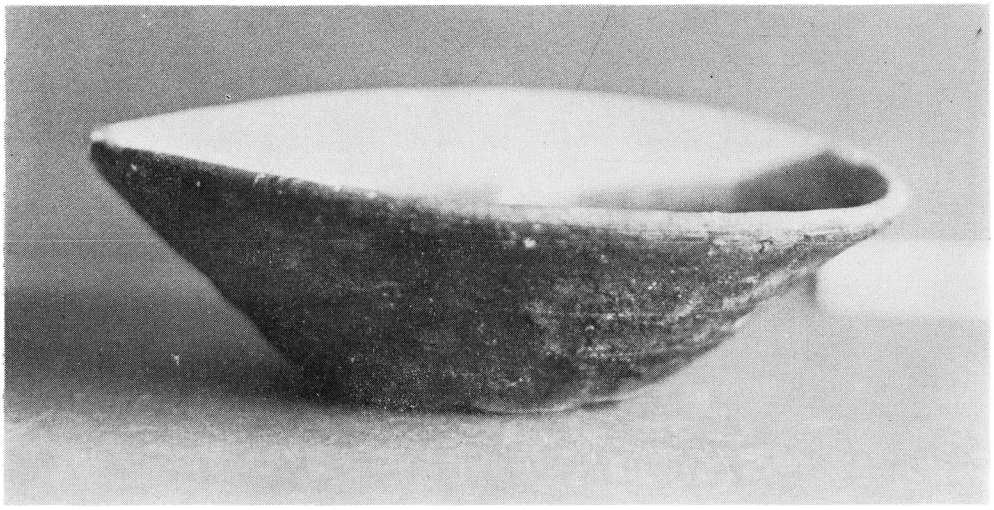




上　3．4号址出土土師器
中　2号址出土　〃
下　　〃　　〃

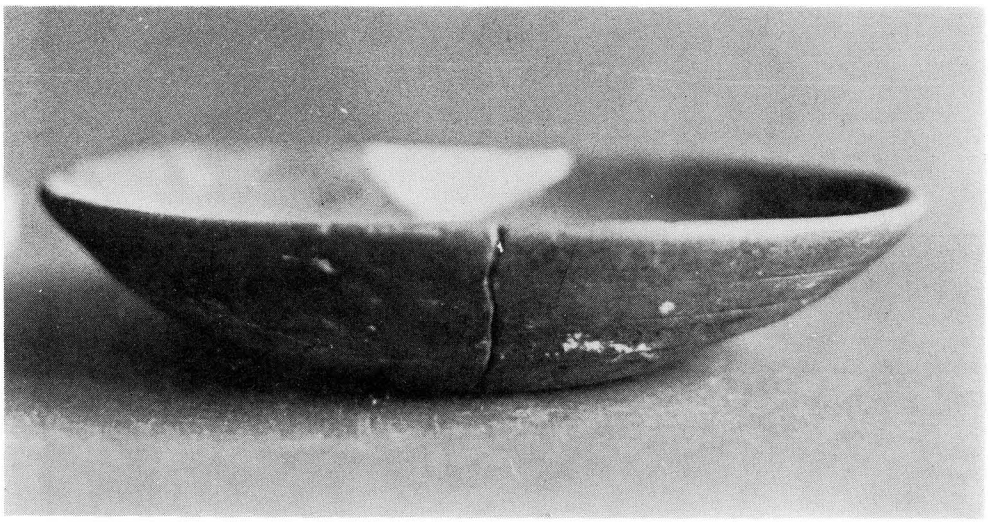
第12図版

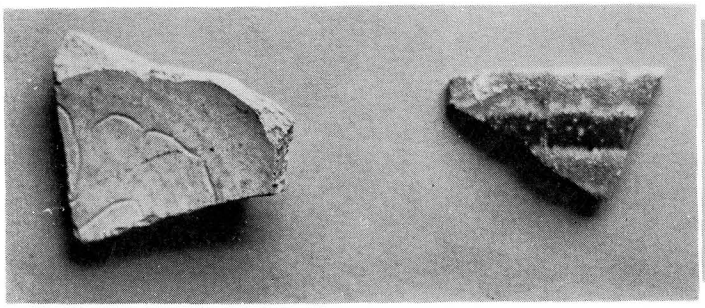


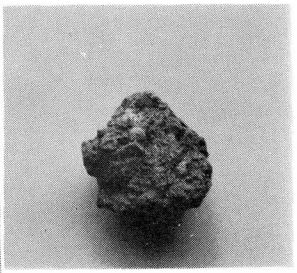


上　3．4号住居址出土土師器
中　　〃
下　　〃

第13図版







上　5号住居址出土土師器

中　〃

下　石和町営住宅付近出土の緑釉陶器及び灰釉陶器及び3号住居址出土の鉄滓